第Ⅲ章　山王塚古墳をめぐる諸問題

第 1 節　古代社会と山王塚古墳

（1）山王塚古墳と武蔵の終末期古墳

小久保徹（元埼玉県立さきたま資料館副館長）

山王塚古墳は日本最大の上円下方墳である。発掘調査で上円下方墳と確認されたものは全国でも当該古墳を含めわずか 6 例で極めて少ない。規模は円丘を乗せる下方部の辺長 69m、上円部径 37m、幅 15m の周堀が巡り、その外周までを墓所の区域である兆域とすれば東西 80m、南北 90m にも及ぶ。他例では下方部辺長は 10 数 m、大きいものでも 30m ほどなので上円下方墳のなかでは突出した規模の巨大古墳といえる。

山王塚古墳は 7 世紀後半の終末期古墳である。前方後円墳の造営停止以降から古墳が作られなくなるまで古墳の時期区分として終末期古墳の呼称が広く使われ、7 世紀代の年代が当てられている。山王塚古墳は終末期古墳の後半にあたり、400 年間続いた古墳造営の終焉と深く関わる時期である。ここでは山王塚古墳について、地域の古墳造営においてその在り方の特徴を挙げ、それらとの関連に基づいて他地域の終末期古墳の在り方と比較する。

山王塚古墳は南大塚古墳群に属する。27 基ほどが確認されているが 5 世紀代の円墳から始まり 6 世紀の円墳、前方後円墳、7 世紀の終末期古墳では円墳、40m 級大形円墳（山王塚西古墳）、そして巨大上円下方墳（山王塚古墳）が造営されるという構成である。終末期古墳はほとんどが群集小円墳であるが、これらとはやや離れて大形墳群として 7 世紀前半の山王塚西古墳が 7 世紀後半の山王塚古墳に接するように 2 基並んで造られている。この 2 古墳は古墳が群集する地域から 400m 程離れて立地している。

山王塚古墳はその規模から地域支配の頂点に立つ人物の墓と考えられ、豊富な装身具や銀象眼六窓鍔などを副葬品としてもつ山王塚西古墳はこの人物の直前の首長墓と考えられる。次代の首長は先代に倣わず円墳や方墳ではない、そして先代とは隔絶した規模をもつ上円下方墳を造ったといえる。埋葬施設はどちらも横穴式石室であるが今まで全くなかった新しい様式の墳墓形式を取り入れたのである。

山王塚古墳の石室石材は群馬県の榛名山二ツ岳噴出物に由来する角閃石安山岩であった。この石材は浮石質で河流によってかなり広汎に流下分布し、群馬県下の利根川流域の古墳の横穴式石室に広く使われているが埼玉県内の利根川流域の古墳にも類例がある。山王塚古墳の直近では直線距離で 20km ほど北方の鴻巣市箕田 9 号墳（宮登古墳）があるが現荒川下流域では山王塚古墳はその南限にあたる。石材をどこから運んだかは不明であるが直近の現利根川とは直線距離では 30km 以上ある。

緑泥片岩の長方形大形板石が 2 枚、床面に転落した状態で発見され、石室側壁両側に仕切りとして立てられていた門柱石と推測できるがこの石材も近くでは採れず、直近の産地と思われる地とは直線距離では 20km ほどある。いずれもかなりの遠隔地から石室石材を運んでいるという特徴を持つ。

南大塚古墳群では横穴式石室の石材はすべて近辺の入間川に産する川原石で角閃石安山岩使用例はない。山王塚古墳直前に造営された山王塚西古墳の横穴式石室も川原石であった。緑泥片岩の使用例も古墳群内にはほかに見あたらない。山王塚古墳の石材利用が南大塚古墳群内の他の横穴式石室と大きく違うのは川原石をそのまま使うのでは無く、石材を加工する工程が入っていることである。角閃石安山岩は転石ゆえに残る曲面を上下左右とも削って加工し、堅牢に積み上がるようにしていた。直方体状の切石では無く、自然面を一部残す削石技法であるのが特徴である。

山王塚古墳では旧地表面を 50cm 程度掘り下げ、ローム土を 180cm 積んだ上に石室を構築している。ごく一部のテストピット調査なので 180cm の積み土が、墳丘盛土と一体なのか、あるいは墳丘盛土を新たに掘り込んだ中に積んだものなのか、または石室部分だけを基壇状に積み上げたものなのか不明である。しかしながら石室構築に先立ってしっかりと基礎地盤を整備するというのは他例で確認されている掘り込み地業と軌を一にするものであろう。掘り込み地業とは石室構築に先立ち、あらかじめ地面を掘り下げた後､下から性質の異なる土を何層にも水平に敲き締めながら積み上げ(版築)、基礎地盤とするものである。朝鮮半島から寺院建築技法として伝わり、飛鳥寺造営が開始された崇峻元年（588）以後行われた技法である。山王塚古墳と比較検討する上で極めて重要と思われる武蔵府中熊野神社古墳は典型的な上円下方墳で定型的な掘り込み地業を施している。山王塚古墳の石室構築技法の詳細は不明ながら寺院建築技法を取り入れている事は間違いなかろう。南大塚古墳群ではこのような技法をもたないので山王塚古墳は前代には無い全く新しい様式の技法を取り入れて出現しているといえよう。

南大塚古墳群の終末期古墳群中における山王塚古墳の在り方を概観すると、群からやや離れた立地、墳丘形態、墳丘および石室構築技法において前代と一線を画した新様式を取り入れた古墳として、そして隔絶した規模をもって現れてくるのが特色といえる。このような在り方をキーワードとして他地域の終末期古墳を取り上げ、山王塚古墳を考える上で関わりがありそうなものには以下の終末期古墳がある。

① 行田市八幡山古墳

墳丘はすでに無く、倒壊した石室石材だけであったのを復元整備している。大形の角閃石安山岩切石、緑泥片岩の巨石を使用した横穴式石室の全長は 16.7m。奥室（玄室)、中室、前室に羨道が付く 3 室構造の巨大石室である。直径 80m の円墳と推定されている。

掘り込み地業では無く数段の根石を積み上げ、その内部を版築で敲き締めながら盛り上げて石室床面とするなど他例にはない技法を有する。

② 行田市戸場口山古墳

埼玉古墳群内にある最も新しい古墳で 1 辺 40m の大形方墳である。墳丘はすでに削平されているが 2 重の堀が確認され外堀を含めると 80m になる。大形前方後円墳が継続的に造られ、その最終時期の前方後円墳である中の山古墳に継続して 7 世紀前半に戸場口山古墳が造営されている。次代首長墓が前代首長墓と接して造営されているのは山王塚古墳と山王塚西古墳との関係と全く同じである。終末期古墳の在り方の類型かどうかは不明である。

③ 小川町穴八幡古墳

1 辺 30m の墳丘をもち 2 重の周溝（堀）が巡る。外堀を含めると 80m になる大形方墳である。

石室下部は掘り込み地業を施し、丁寧な版築により基盤整備されている。石室、墳丘ともに良く整った古墳で内周溝（堀）の外周規模が山王塚古墳の墳丘規模と類似する。周辺に古墳は全く見当たらず単独立地である。

④　坂戸市新山２号墳

墳丘がわずかに残る小円墳とされていたが発掘調査の結果、約 50m の方墳であることがわかった。10m 内外の終末期古墳群の中にあって隔絶した規模をもち、これら位置とはやや離れて立地しているのは山王塚古墳の在り方と似る。

⑤　鶴ヶ島市鶴ヶ丘稲荷神社古墳

掘り込み地業は武蔵府中熊野神社古墳と同じく定型化したものである。墳形は方形に巡る堀により方墳とされるが墳丘は後世の畑作による変形がある。近くに全く同じ掘り込み地業を施す鶴ヶ丘１号墳がある。墳丘はほとんど無く石室の一部のみ残存していたが鶴ヶ丘稲荷神社古墳と同じく堀と裾部との間に広い空間が想定される。これら２古墳の墳丘は円形になる可能性もあり、墳形、古墳造営技法の系譜を考える上で武蔵府中熊野神社古墳、山王塚古墳と何らかの関連が想定される。

⑥　府中市武蔵府中熊野神社古墳

山王塚古墳と同じ上円下方墳であるが全面が葺石、貼石で覆われるなど形態はかなり異なる。しかし下方部の辺長は山王塚古墳の上円部径とほぼ同じで周辺の部分調査で 90m 程度の規模である可能性が指摘されている（山王塚古墳は東西 80m 南北 90m）。

山王塚古墳と武蔵府中熊野神社古墳は上円下方墳の典型とも言うべき古墳で形状はすべて定型化した要素をもつと考えられる故に両者の同異点はそのまま上円下方墳の性格の差を特徴的に表すと共に、同じように被葬者あるいは古墳造営を主宰した人物の社会的地位の差をも特徴的に表すと考えられる。終末期古墳後半に属するので古墳時代の終焉を示す地域の終焉古墳として位置づける事も可能でその場合は終末期の大形古墳の性格付けとも関わろう。このように措定した上で特に山王塚古墳と武蔵府中熊野神社古墳それぞれの歴史的、地理的環境、古墳築造上の諸要素の比較検討をすることが、武蔵の終末期古墳、古代社会を考える上で重要な課題となると考えられる。

⑦　三鷹市天文台構内古墳

山王塚古墳と比べるとかなり小形になるが上円下方墳である。周辺に高塚古墳群は無く横穴墓群が密集した地域に立地するが山王塚古墳も東方 2km に岸町横穴墓群が存在する。終末期古墳の在り方について何らかの共通要素があるのか検討課題であろう。

地域の有力者墳墓としての終末期古墳の在り方は円墳、方墳および上円下方墳がある。終末期の群集古墳がほぼ類似した規模の小円墳であるのにくらべ、これら有力者の墳墓は規模の偏差が大きい。古墳の立地、埋葬施設の形態、構築技法も様々で更に横穴墓群との関わりもある。

終末期古墳の時期は群集墳あるいは横穴墓が爆発的に増加する。社会の生産力が飛躍的に高まった時期であるが有力者墳墓の様々な偏差は富と権力の集中度の違いであろう。

山王塚古墳被葬者が生きた時代は、中央にあっては天智朝から壬申の乱を経て天武朝に至る律令制古代国家が整備され、地方支配の枠組みが変貌してゆく時代でもあった。

古墳の在り方も変化し、400 年間続いた古墳造営が終焉する画期でもある。このような歴史状況

にあって、希有な墳形である上円下方墳の形態をとり、日本最大の規模を持つ山王塚古墳は日本古代史を解明する上で学術的に非常に重要である。また 1400 年の長きにわたり上円下方墳としての原型をよくとどめている山王塚古墳をこのまま遺し、保存して後世に伝える事は十分意義あることである。

引用参考文献

(1) 埼玉県立さきたま資料館　1980『埼玉県指定史跡　八幡山古墳石室復原報告書』

(2) 利根川章彦　1994「県内主要古墳の調査（Ⅲ）」『調査研究報告第 7 号』埼玉県立さきたま資料館

(3) 小川町　1999『小川町の歴史　資料編 1　考古』

(4) 藤野一之　2014「坂戸市新山古墳群（4 区）の調査」『第 47 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか

(5) 岩瀬譲ほか　1985『鶴ヶ丘（E 区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 45 集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(6) 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会　2005『武蔵府中熊野神社古墳』

(7) 府中市教育委員会　2013『国史跡　武蔵府中熊野神社古墳保存整備事業報告』

(8) 塚原二郎　2010「国史跡武蔵府中熊野神社古墳と多摩の古墳」『武蔵野84-1号』

(9) 三鷹市遺跡調査会・三鷹市教育委員会　2011『天文台構内古墳』

鈴木嘉吉　1974「寺院－伽藍の構成と配置－」『古代史発掘 9　埋もれた宮殿と寺』 講談社

小久保徹　2000「終末期の方墳について－鶴ヶ丘古墳群をめぐって－」『調査研究報告』第13号 埼玉県立さきたま資料館

塩野博　2004『埼玉の古墳　北足立・入間』さきたま出版会

白石太一郎　2005「前方後円墳の終焉」『終末期古墳と古代国家』吉川弘文館

（2）山王塚古墳と畿内の終末期古墳
―終末後期古墳論に関する素描―

広瀬和雄（国立歴史民俗博物館名誉教授）

上円下方墳という希有な墳形を採用した山王塚古墳。そこには版築工法や「基壇」の上部に横穴式石室を構築するという、既往の古墳にはなかった革新的な側面が目立つ。それは終末前期古墳とは違った、7 世紀中頃以降の終末後期古墳のおおきな特性であって、畿内中枢と共通した装いともみなしうる。ここでは彼我の事例を比較しながら、終末後期の山王塚古墳を考えてみたい。それは同時に、「終末後期古墳論」のための素描でもある。

1　古墳の諸段階

前方後円墳が終息してからも古墳はつくられるが、それがあらわす関係性は大幅に変容している。9 世紀までつづいた北東北の末期古墳を除くと、前方後円墳が造営された時代と、それが終息してからの終末期古墳にわけて考えたほうが、古墳という墳墓は理解しやすい。さらに、終末期古墳は 7 世紀中頃を境に、前期と後期で大きな差異をみせるので、つぎの 3 段階が設定できる。

第 1 段階。3 世紀中頃から 7 世紀初め頃、古墳時代の前・中・後期である。北海道・北東北と沖縄を除く日本列島で前方後円墳が営造され、それを頂点として前方後方墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳などの多彩な墳形があいまって共通性と階層性をみせる。それは広域におよぶ中央―地方の政治秩序を体現した政治的墳墓なのだが、畿内中枢の政治勢力―大和川水系の有力首長層―が終始、その中核をになう。

第 2 段階。前方後円墳が終焉を迎えた 7 世紀初め頃以降、7 世紀中頃にいたる終末前期である。しばらくの間は、前代の前方後円墳などとおなじ古墳群で、もしくは立地を違えて、円墳や方墳が築造される。前方後円墳を中軸とした古墳に政治秩序を媒介させる前代のシステムが、変容しながらも依然として維持されるようだが、その直接的な有効範囲は旧国ほどの範囲に狭まっている。7 世紀代で最大の方墳は一辺 80m の千葉県栄町岩屋古墳、おなじく円墳は直径 82m の栃木県壬生町車塚古墳で、畿内地域ではないことがそのあたりの事情を物語っている。

第 3 段階。7 世紀中頃から 8 世紀初め頃の終末後期である。これまでの円墳や方墳に加えて上円下方墳、上八角下方墳、八角墳のような新規の墳形のほか、版築工法や掘り込み地業、花崗岩切石や漆喰塗布、墳丘周囲の石敷きや格狭間といった仏教寺院関連の要素、さらには四神相応の思想や天円地方の観念などの中国イデオロギーがみられ、それ以前の古墳とは大幅に変質している。畿内、備後南部、多摩川上流域、白河などに偏在する傾向もみられる。

山王塚古墳が編年される終末後期古墳は、各地で一気に少なくなって、ごくかぎられた階層の造墓になってしまう。そして、それぞれが個性的な相貌をしめす。永年つづいてきた古墳という墓制の意味が大幅に変質したようだ。畿内では大和の飛鳥や南河内の磯長谷などが目につくが、山城や摂津や和泉ではほとんど見あたらない。

2　終末後期古墳の革新性

(1) 仏教的色彩

①花崗岩の切石

奈良県明日香村岩屋山古墳は一辺 55m、高さ 12m の方墳である。玄室の幅 2.7m、長さ 4.7m、高さ 2.6m、全長 16.7m の両袖式横穴式石室は、玄室の側壁・奥壁とも 2 段に花崗岩の切石を積む。きわめて高い硬度の花崗岩を小叩きして、あたかもナイフで切りとったかのように壁面を平滑に仕上げる。7 世紀中頃の築造である。こうした花崗岩切石技法を駆使した横穴式石室の構築は、奈良県橿原市小谷古墳、同桜井市文殊院西古墳、同平群町西宮古墳、同葛城市神明神社古墳、大阪府太子町叡福寺北（聖徳太子墓）古墳など、7 世紀中頃から末頃にかけての大和や河内地域の有力古墳にみられる特色である。

花崗岩の切石技法は、寺院堂塔の礎石や基壇化粧石などに用いられた技法で、6 世紀末頃を嚆矢とする寺院建築に際して導入されたのはいうまでもない。もっとも、横穴式石室の壁体を切石で整美に加工するのは、東国や出雲地域のほうが 6 世紀後半もしくは末頃からと早いが、それらは鉄ノミで削って整形できる凝灰岩や砂岩質の軟質な石材なので、硬質の花崗岩とは技術系譜が明白に異なるし、投下された労働量は比較にならない。

ここで注意しておきたいのは、4 世紀中頃から後半にかけて、京都府与謝野町蛭子山古墳の舟形石棺、同作山 1 号墳の組合せ式石棺、大阪府柏原市松岳山古墳の長持形石棺の蓋石と底石、京都府向日市妙見山古墳の組合せ式石棺、山梨県甲府市大丸山古墳の組合せ式石棺など、切石加工の花崗岩でつくられた石棺があることだ。ただ、そうした技術系譜は、その後は継承されずに、いったん途絶してしまう。

②漆喰の塗布

横穴式石室の壁面を切石で整美に仕上げるのと関連するのが、そこへの漆喰の塗布である。7 世紀中頃に築造された奈良県奈良市帯解黄金塚古墳は一辺 30m の方墳で、前室をそなえた全長約 16m の両袖式横穴式石室には、扁平な「榛原石」を積む。塼積みを模した玄室、前室、羨道の壁面は漆喰塗りで整美な白壁にする。大阪府高槻市・茨木市阿武山古墳は一辺 18.5m、高さ 0.2m に地山を削りだすだけで、明瞭な墳丘は認めがたい。幅 1.1m、長さ 2.7m、高さ 1.2m の無袖式横穴式石室には、夾紵棺が置かれた塼積の棺台を設えるが、石室の壁面のみならず棺台の平面や側面は全面漆喰が塗られる。推定 60 歳前後の男性人骨があって、ガラスと銀の針金で製作された玉枕や冠帽がみつかっている。墓道からの須恵器は 7 世紀中頃をしめす。同太子町二子塚古墳の横穴式石室は、自然石の表面に漆喰を塗る。

奈良県明日香村高松塚古墳や同キトラ古墳の切石づくりの横口式石槨には、漆喰塗りでいわば白壁となった四壁や天井に、四神や星宿や婦人像などの精緻な壁画を描く。こうした白壁づくりが、寺院堂塔の壁や築地塀などの模倣なのはまず動かない。

東国では一辺 54m、高さ 11m の方墳、7 世紀後半につくられた群馬県前橋市宝塔山古墳の横穴式石室の壁面が、漆喰を塗布した白壁づくりである。複室構造の両袖式横穴式石室は安山岩の切石切組づくりで、玄室幅 2.9m、長さ 3.3m、全長 12.4m である。

③版築工法

直径 20 ～ 25m の円墳、奈良県明日香村高松塚古墳の墳丘は 5 ～ 10cm ぐらいの厚さで、土を叩き締めながら水平に積みあげる版築工法で構築される。上円下方墳の奈良県奈良市石のカラト古墳や、八角墳の奈良県明日香村牽牛子古墳などの墳丘も版築工法で建設されるが、いずれも 7 世紀後半頃から末頃にかけて築造された終末後期古墳である。堰板で挟まれた土層を突き棒などで固く叩きしめるという土盛法は、寺院堂塔の基壇や築地塀などの敷き固めなどに用いられた技法なのもいうまでもない。

版築工法は墳丘だけではない。7 世紀末頃の東京都府中市熊野神社古墳では、最大幅 2.7m、玄室長 2.6m、全長約 8.8m で、凝灰質砂岩の切石を切組技法で積んだ横穴式石室の基礎工事として、掘り込み地業が設けられる。福島県白河市野地久保古墳の横口式石槨などでは、その下部を一段掘り込んで、そこに版築で堅固な基礎をつくる。

そもそも掘り込み地業は、堂塔基壇の下部の地盤を掘りこんで、均質な土砂を版築工法で突き固めた硬い人工地盤で、瓦葺きで重量建築の堂塔が不同沈下しないように用いられた工法である。石舞台古墳や蛇塚古墳のような巨石墳ならともかく、いっそうの小型化がはじまった終末後期の横穴式石室の基礎工事には、さほど必要ではないように思われる。

④墳丘周囲の石敷き

奈良県奈良市帯解黄金塚古墳は一辺 30m で 2 段築成の方墳だが、段差をもった二段の石敷きを墳丘の外縁に沿わせてめぐらす。二列に縦積みした縁石で区画したなかに、平滑な自然石を水平に敷きつめた石敷きは、上段の幅が約 0.5m、下段の幅が約 1.6m で、7 世紀中頃の須恵器が出土している。奈良県明日香村牽牛子塚古墳は対辺約 22m の八角墳で、墳丘の周囲を切石と砂利を三重に敷いた石敷きが囲繞している。上円下方墳の石のカラト古墳でも、墳丘の周囲に礫を敷きつめる。

こうした墳丘の裾に沿ってめぐらされた石敷きは、寺院の堂塔をとりまく雨落ちとおなじ形状・構造を呈している。これもことさら指摘するまでもないことだが、土盛りでつくられた墳丘の周囲に、雨落ちが必要なはずがない。

それらとは様相を異にするが、横穴式石室のなかにも石敷きや塼敷きがみられる。奈良県香芝町平野塚穴山古墳の横口式石槨の床面や、同平野 2 号墳の自然石積み横穴式石室の玄室床面には、それぞれ凝灰岩の切石が敷かれる。一辺 10m の方墳、大阪府茨木市初田 1 号墳の無袖式横穴式石室（幅 1.25m、長さ 2.9m）の床面には、固く焼かれた塼が敷きつめられる。大阪府河南町アカハゲ古墳では、横口式石槨の前室に榛原石を敷く。

塼や凝灰岩切石は堂塔の床に敷かれたり、それらの基壇化粧などに使われるが、横穴式石室に敷かれた凝灰岩の切石や榛原石も、堂塔とおなじような感覚で用いられたのであろうか。もっとも、韓国扶余陵山里東古墳群の横穴式石室の床にも塼が敷かれるので、それとの関連も無視はできないが。

⑤漆棺

夾紵棺・漆塗木棺・漆塗籠棺・漆塗陶棺などの漆を用いた棺は、それまでの刳抜き式家形石棺と交替するかのように、7 世紀中頃から上位クラスの棺形態として製作される。漆棺のなかでも最上位なのは夾紵棺で、布と漆を何枚も交互に貼り合わせるその技法は、乾漆像などの応用とみてもいいのではないか。

漆喰塗りの塼積み棺台に置かれた阿武山古墳の夾紵棺は、幅 0.62m、長さ 1.97m、高さ 0.51m で、20 枚以上の布を漆で固めて棺をつくり、内面に朱漆、外面に黒漆を塗る。牽牛子古墳の横口式石槨にはふたつの棺台が造り出され、各々に麻布 30 枚を重ね、金銅製八花形座金具、金銅円形座金具、七宝亀甲形飾り金具を飾った夾紵棺が置かれる。ほかには奈良県明日香村野口王墓（天武・持統陵）古墳や大阪府太子町叡福寺北（聖徳太子墓）古墳など、ごく一部にかぎられた特別な棺である。

夾紵棺は装飾的な見せる棺で、家形石棺などと違って運ばれる棺である。内外に麻布を二枚重ね、その上に漆を重ね塗りした高松塚古墳の漆塗木棺も、六花形座金具や銅製座金具を飾る。ほかでは、直径 8m ほどの円墳の奈良県斑鳩町竜田御坊山 3 号墳では、花崗岩を加工した横口式石槨に、内外に漆を塗って漆棺に仕上げた須恵質の陶棺（幅 0.47m、長さ 1.57m）を納め、琥珀製枕や三彩有蓋円面硯が出土している。

東国では 7 世紀後半頃の埼玉県行田市八幡山古墳が唯一の事例である。ここでは夾紵棺のほかに漆塗木棺もあったようで、鉄釘接合木棺とあわせて 3 種類の棺が採用されたようだ。ちなみに、7 世紀後半頃の西宮古墳の刳抜式家形石棺は棺身しか遺っていないが、その上縁部の外側に受け部が造り出される。あたかも夾紵棺の蓋受けを模倣したかのようである。

⑥格狭間

大阪府羽曳野市御嶺山古墳（直径 30m ほどの円墳か）の内法長 2.22m、幅 1.45m、高さ 1.81m の横口式石槨には、長さ 1.98m、幅 1.29m、高さ 0.37m の凝灰岩製で朱彩された棺台が設けられる。そこに金銅製の錠前をつけた漆塗木棺が置かれるが、その各側面には格狭間が浮き彫りされている。7 世紀末頃の年代が付与される。

宝塔山古墳の白壁づくり横穴式石室の奥壁沿いに置かれた家形石棺は、身部の各側面がそのまま「脚部」として下方に伸ばされ、底面の下部がいわば中空になった特異な形式である。そのように造り出された「脚部」の各辺に、格狭間が切り込まれる。叡福寺北（聖徳太子墓）古墳の横穴式石室には、夾紵棺を置いた棺台が記録されているが、そこにも格狭間がほどこされていたようである。

7 世紀代の格狭間は、玉虫厨子の台座や仏像の台座など、仏像が安置される台を飾った紋様である。したがって、棺台や石棺に飾られた格狭間は、そこに埋葬された亡き首長の遺骸が、仏に擬せられたとの類推をもたらす。

（2）中国思想

①天円地方の観念―上円下方墳

石のカラト古墳は一辺 13.8m、東辺での高さ約 2.91m、2 段につくられた上円下方墳である。1 段目の方台部の高さは 1.36m、2 段目の円形部の直径は 9.2m、高さは 1.55m で、それぞれ数工程におよぶ版築工法で盛土を積む。各段の斜面と平坦面には河原石を葺くが、墳丘の周囲にも礫敷きをほどこす。横口式石槨は内法で幅 1.03m、長さ 2.6m で、金銀製玉、銀装唐様大刀鞘の責金具などとともに漆断片が出土している。木心乾漆棺がおさめられていたようだ。7 世紀末～8 世紀初め頃である。福島県白河市野地久保古墳は一辺 16m の上円下方墳で、墳丘には河原石の葺石と敷石をほどこすが、周溝はない。上円部につくられた横口式石槨の基礎には掘り込み地業をほどこす。

畿内では上円下方墳は 1 基だが、それに先行して方台部に八角台が載った上八角下方墳が 2 基、確認されている。京都市御廟野（天智陵）古墳は、一辺 45m の方台部が上下 2 段につくられる。下

段石列の外側には幅数 m のテラスが四周し、その裾からの高さは 12m 前後である。上段部は載頭八角錐形で、斜面には河原石が散乱し、墳頂部は平坦で拳大の河原石があって、外縁の外側には花崗岩切石を平面八角形にめぐらす。奈良県桜井市段ノ塚（舒明陵）古墳は、3 段の方形壇に 2 段の八角台が載る。下段部の幅は約 90m で、その上段は東・南・西面がコ字形を呈し、貼石と外護列石をほどこす。八角台には地覆石の上部に、榛原石の板石がほぼ垂直に積まれる。

八角墳についても少しふれておく。野口王墓（天武・持統陵）古墳は対辺 38 ～ 45m の八角墳である。『阿不幾乃山陵記』によれば、墳丘は 5 段築成の八角形で周囲に石壇をめぐらす。長さ約 7.5m の横口式石槨に夾紵棺が安置され、合葬された持統天皇の火葬骨は金銅製容器に納められる。牽牛子塚古墳は対辺約 22m の八角墳で、墳丘の周囲には切石を使った石敷きが囲繞し、墳丘は版築工法で築成される。約 80 トンの凝灰岩（二上山）を刳り抜いた横口式石槨のなかには 2 基の棺台が造り出され、七宝飾り金具で飾られた夾紵棺を置く。

上円下方墳は〈天円地方の観念〉を体現する。「円形は天でカミの空間、方形は地で人の場所」をあらわす。したがって、上円部に埋葬されていた亡き首長はカミに擬せられる、そう観念されていたのではないか。いっぽう、法隆寺夢殿や興福寺北円堂、あるいは京都府樫原廃寺の塔、さらには難波宮の八角建物や熊本県鞠智城など、八角形は 7 世紀後半前後の仏教寺院や難波宮などの堂塔などにみられる。

②四神相応の思想

帯解黄金塚古墳の石敷きをめぐらせた墳丘の北、東、西の三方に、東西約 120m、南北最大約 65m の範囲に、コの字状に墳丘を囲む周堤が造成される。南方は自然地形がそのまま下降していく。北に玄武、東に青龍、西に白虎に擬した人工盛土で三方を囲繞し、南は開放する。藤原宮や平城宮などの宮都につうじる〈四神相応の思想〉を具現したものであろう。

7 世紀中頃の大阪府羽曳野市塚穴（来目皇子墓）古墳は、一辺 53 ～ 54m、最大高が約 10m、凝灰岩ブロックの貼石をそなえた 3 段築成の方墳で、墳丘の四方を周堤が囲繞する。東・北・西側は自然地形を利用し、北側周堤の幅は約 39m、墳丘裾からの高さは 3.4m 程度にもおよぶ。ここでは南面にも人為的に造成された周堤がめぐる。その 2 段築成の上幅は 13m、南からの高さ 2.5m で、南端での盛土の厚さは 1.8m で、礫を充填した暗渠もみつかっている。切石づくりの両袖式横穴式石室をそなえる。

これら以降は人工の「周堤」ではなく、丘陵尾根などの自然地形で三方を取り囲んだり、古墳の北・東・西側の三方を大きく掘り込んだりして、四神相応に仕上げるのが目立つ。大がかりなものでは奈良県平群町西宮古墳や牽牛子塚古墳など、小規模なものでは奈良県上牧町上牧久渡 2 号墳などがある。

7 世紀後半の西宮古墳は一辺 35.6m、正面からの高さ 7.2m 以上で、下段は地山整形、上段は盛土で形成された 3 段築成の方墳で、墳丘斜面に板石、テラスには丸みのある礫石を貼石とする。玄室幅 1.95m、長さ 3.7m、高さ 2.1m、羨道幅 1.8m、長さ 10.1m の両袖式横穴式石室は、花崗岩切石の 1 段積みで、刳抜式家形石棺を置く。この墳丘をとりまく背後の丘陵は、南辺 120m、北辺 45m、奥行 70 ～ 80m の台形に削り込まれ、四神相応の思想をあらわす。ちなみに、北側の底部と丘陵頂部とは 12m 以上の比高をもつ。上牧町上牧久渡 2 号墳は全長約 9m の両袖式横穴式石室をそなえた直径 16m の円墳だが、丘陵尾根の南斜面で、北・東・西側の三方を大きく掘り込み、その南側に墳

丘がつくられる。北側の掘り込みの深さは約 7.5m で、その幅の斜距離は約 13m にもおよぶ。

畿内以外の事例も少しみておこう。7 世紀後半の滋賀県長浜市松尾宮山古墳は、一辺 17 × 13m の方墳とされるが、二重にめぐらされた外護列石は多角形を呈するので、多角形墳なのは動かない。丘陵南斜面の北・東・西側を掘り切って四神相応の地形に仕上げ、それらに囲まれて墳丘をつくる。南側は平地までつづく斜面をなす。自然石積みの無袖式横穴式石室（幅 1.4m、全長 8.5m）に、もはや突起がなくなった刳抜式家形石棺を置く。ほぼ同時期の島根県奥出雲町岩屋古墳は一辺約 15m の方墳（円墳）で、平滑な自然石を 1 段積みした全長約 7m の両袖式横穴式石室をもつ。谷の突き当たりの丘陵南斜面の尾根筋をやや下ったところで、おなじように四神相応の地形に改変する。

四神で墳丘を、ひいてはそこに埋葬された首長の遺骸を辟邪する。ちなみに、高松塚古墳やキトラ古墳の四神壁画もおなじような役割をもつ。漆喰で白壁に仕上げられた壁面と閉塞石に描かれた玄武、青龍、白虎、朱雀で、死した首長の遺骸や霊魂を守護すると観念されたわけだ。

(3) 畿内終末後期古墳の特性

上述してきたように、畿内を中心とした終末後期古墳には、仏教寺院の諸要素と〈天円地方の観念〉ならびに〈四神相応の思想〉という中国思想が適用されている。

ひとつは寺院建立技術、ならびに堂塔を構成している諸施設の古墳への応用である。横穴式石室壁体の花崗岩切石技法や漆喰塗布、さらには墳丘構築に用いられた版築工法などは前者である。墳丘周囲にめぐらされた石敷きや、横穴式石室や横口式石槨の床面に設けられた塼敷きなどは後者である。漆棺や格狭間も、仏像やその台座に淵源を求めうるものである。

注意すべきは、これらが古墳造営にとって必須の条件とはいい難いことである。従来の盛土工法で十分なのに、版築工法を用いて墳丘を堅固に仕上げる必要性があるのかどうか。墓室を整美に仕上げる切石ならば軟らかい凝灰岩でも十分だが、ことさら硬い花崗岩をわざわざ綺麗に整形するのはどうしてか、といった疑念が湧き出る。

仏教寺院との密接不分離な営為は、けっして偶然ではなかろう。そこには明瞭な意志が発動されたとみたほうが理解しやすい。石敷きの雨落ちをめぐらす墳丘は堂塔（仏を祀る場）に見立てられ、花崗岩切石、塼敷き、版築、漆喰などは、堂塔に似せるための工事とみてはどうか。格狭間は仏像の台座とつよくかかわるから、漆棺や石棺におさめられた首長の遺骸は仏に擬せられたのではないか。この頃の仏は「蕃神」（となりのくにのかみ・あだしのくにのかみ）だから、亡き首長はカミと観念されたのであろう。そうだとすれば、古墳時代前期以来のカミ観念が、深層では変貌しながらもつづいていて、それが外来の思想をまとって、7 世紀中頃になって一気に顕在化したことになる。

いまひとつは、四神相応の立地や天円地方の観念などの中国思想の採用だが、そこからはカミに昇華させた首長を辟邪するという観念が読みとれる。畿内を中心とした前・中期の巨大・大型前方後円墳の後円部墳頂には、天円地方の観念を体現した「内方外円区画」が設けられるが、それとのいわば〈不連続の連続〉とでもいうべきイデオロギーが、古墳時代の首長層には潜在しながらつづいていたようだ。

〈亡き首長がカミと化して共同体を守護し、その繁栄をもたらす〉という共同観念が、3 世紀中頃以降の前方後円墳の本質である。そうした共同幻想は変容しながらも終末後期までつづいていた。もっともこの時期になると、〈カミと化す〉のはごく一部の有力首長（貴族）に限られてしまうが。

3　武蔵の終末後期古墳と東山道武蔵路

(1) 山王塚古墳と畿内終末後期古墳

①山王塚古墳の特性

本稿の対象となった山王塚古墳をはじめ、東京都三鷹市天文台構内古墳、熊野神社古墳、石のカラト古墳、静岡県沼津市清水柳北 1 号墳、野地久保古墳と、わずか 6 例しか確認されていない上円下方墳という希少な墳形のなかで、山王塚古墳は一辺 63m、高さ 5m と最大規模である。まずは、天円地方の観念という中国思想にもとづく墳形の採用が、山王塚古墳の第一の特性である。

前述したように、円は天でカミの住まいする空間、方は地で人の空間とみるのが天円地方の観念だが、カミの空間とみなされた上円部には横穴式石室がつくられる。そこに埋葬された亡き首長の遺骸と霊魂が、カミと観念されたのであろうか。

注意をひくのは、上円下方という墳形が畿内では石のカラト古墳ぐらいしかない、という事実である。上段が八角形で下段が方形の京都市御廟野（天智陵）古墳や奈良県桜井市段ノ塚（舒明陵）古墳をふくめても、いまのところ 3 例しか見あたらない。それらを除くと武蔵北部の山王塚古墳、武蔵南部の天文台構内古墳ならびに熊野神社古墳と、上円下方墳の 3 ／ 6 基が武蔵地域という高い頻度になる。この特異な墳形の採用が、中央経由であったのか、武蔵有力首長層の裁量であったのか、十分に吟味されねばならないが、この数字の意味は大きい。

第二の特性は墳丘や外域施設の構造にある。山王塚古墳には葺石や貼石の外表施設はないが、石室の延長部の箇所は掘り残して土橋にした、最大幅 19m の周濠をめぐらす。その周囲には平地がひろがる。したがって、畿内の牽牛子塚古墳や帯解黄金塚古墳のように、墳丘周囲に石敷きをめぐらすわけではないし、北、東、西の三方を自然の丘陵尾根や人工の高まりで画するという、四神相応の思想も認めがたい。

なによりも、一辺 69m と大きさへの指向性がつよい。その観点から興味深いのは、1 段目の方台部の四周縁辺だけ、それ以外の平坦部より高く土手状に盛土を積み上げることである。墳丘を遠方から見れば低い平坦部は見えずに、高い縁辺部が 1 段目全体の高さとして映ずるから、少ない盛土（労働量）で大きな効果を生みだす装置といえる。浅い周濠とあいまって墳丘をいっそう大きく見せる工夫と評価できそうだ。小型化が著しい終末後期でのこうした造作は、いわば時代への逆行ともいえる現象に映ずる。もっとも、おなじ北武蔵で山王塚古墳とほぼ同時期の行田市八幡山古墳の墳丘は直径 80m と、終末後期としてはきわめて大型である。畿内では岩屋山古墳が一辺 55m、塚穴（来目皇子墓）古墳が一辺 53 ～ 54m と大きくて、それらにつづく時期の野口王墓（天武陵）古墳は対辺 38 ～ 45m、さらに後出の高松塚古墳は直径 20 ～ 25m にすぎない。南武蔵でも同様に、天文台構内古墳は一辺 31m、熊野神社古墳は一辺 32m と小型化している。

第三の特性は、横穴式石室にある。いまのところ、横穴式石室の羨道と前庭部の一部が調査されただけなので、詳しくはこれからの課題である。したがって、角閃石安山岩を加工した切石を積んだ羨道側壁はまっすぐで床は礫敷き、前門には緑泥片岩の板石を立て、その基礎には角閃石安山岩を敷く、といった以外の平面プランや構造などは不明である。また、鉄釘が出土しているので、鉄釘接合木棺があったらしいが、漆棺があったかどうかはわからない。

重要なのは、横穴式石室の下部構造についての事実である。石室の構築に際して、まず表土が除

去される。ついで、均質なロームを厚さ 1.3m ほど、版築状に丁寧に積み上げる。いわば「基壇」をつくって、その上部に石室を構築する。まさしく古代寺院の堂塔と同等の扱いを、山王塚古墳の横穴式石室は目指す。東国の終末後期古墳に目につく掘り込み地業は、ここでは採用されない。

第四の特性は、墳丘築成への版築工法の適用である。あたかも横穴式石室をパックするかのように、黄赤色のハードロームが版築状工法で分厚く積まれる。留意したいのは、そのひとつの供給先が周濠ということである。おそらく、ハードローム層を掘削したのであろう、周濠の底部が各所で深く堀くぼめられ、その後、埋め戻されて底部の凹凸が平坦にされる。どれくらいの比率かはわからないが、近場でまかなったのは確実なようだ。ちなみに、周濠の立ち上がりは緩やかで、墳丘との屈曲点はさほど明瞭ではない。

②山王塚古墳と畿内終末後期古墳の異同

前項までの検討で、山王塚古墳と畿内の終末後期古墳の共通性と差異性が明らかになってきた。つぎに整理しておこう。

第一、墳丘を築成した版築工法は、畿内では高松塚古墳やキトラ古墳などにみられるが、東国では山王塚古墳のほかに熊野神社古墳などでも確認される。寺院造営技法で終末後期古墳が築造されたのである。もっとも花崗岩の切石、漆喰塗布、墳丘周囲の石敷、漆棺、格狭間などは山王塚古墳にはみられない。

第二、天文台構内古墳、熊野神社古墳、神奈川県川崎市馬絹古墳、埼玉県小川町穴八幡古墳、八幡山古墳、野地久保古墳などの横穴式石室には、その構築に先立って版築工法による掘り込み地業が設けられるが、山王塚古墳では版築状工法で「基壇」が築かれる（八幡山古墳もその可能性がある）。重量が軽減化された終末後期の横穴式石室や横口式石槨の基礎を、それほどまでに固く叩き締める必然性は奈辺にあるのか。

ちなみに、上記した掘り込み地業も山王塚古墳の「基壇」も、ふたつとも堂塔の基礎工事なので、その上部につくられた横穴式石室は、堂塔に擬せられたともみなしうる。ちなみに、現状では畿内でのこうした事例は見あたらない。

第三、上述したように、天円地方の観念を表象した上円下方墳は武蔵地域では 3 例と多いが、畿内では 1 例にすぎない。そして、その採用年代も武蔵のほうがやや早いので、どちらかといえば武蔵有力首長層の主導性が発揮された可能性も否めない。ただ、四神相応の思想はみられない。

第四、下方部の周縁盛土に象徴される墳丘の大型指向や、角閃石安山岩、緑泥片岩、河原石など複数の石材を使い分けた、そしておそらく胴張りで切石づくりで複室構造と推測される、武蔵地域の伝統的な横穴式石室は、畿内とは重ならない特性である。畿内中枢ではこの時期、主流となる墓室は横穴式石室から横口式石槨へと軸足を移動させている。

山王塚古墳の破壊された横穴式石室の一画からは、7 世紀後半頃の須恵器平瓶やフラスコ形長頸壺 3 個体などが出土している。須恵器長頸壺の供献は、天文台構内古墳や東京都大田区多摩川台 8 号墳などにもあって、武蔵地域での共通した葬送儀礼の一端をしめすかのようだ。

このようにみてくると、仏教寺院的技法や古代中国思想の採用という、畿内中枢との共通した相貌と、横穴式石室にみられる武蔵地域の伝統的側面との結びつきが、山王塚古墳を構成していることがわかる。山王塚古墳は畿内中枢とのつよいつながりを秘めながらも、在地の意志も表現した墓制と

みることができそうだ。

(2) 山王塚古墳と東山道武蔵路

①南武蔵の終末後期古墳

各地の終末後期古墳には単独墳が目立つ。首長墓が累代的につづいて古墳群を形成することはあまりない。そして、武蔵南部などのように既往の有力古墳がなかった地点に築造されたりする。前方後円墳のように広域の政治秩序を媒介するというより、畿内中枢と結びついた有力首長の顕彰碑といった意味合いがつよい。ちなみに、山王塚古墳には山王塚西古墳が西接するが、その間には一、二代ほどの時期的空白がありそうだ。

前述したように、山王塚古墳とおなじ上円下方墳は、武蔵南部の多摩川中流域左岸に、天文台構内古墳と熊野神社古墳の 2 基が築造される。版築工法で造成された天文台構内古墳の墳丘に葺石はなく、石室の前面を掘り残した幅約 8m の周溝をめぐらすのは、山王塚古墳と似ている。 シルト質砂岩を積んだ切石切組づくり胴張り複室構造の両袖式横穴式石室は、深さ 70cm の掘り込み地業をともなう。7 世紀後半頃の北武蔵産の土師器杯と湖西窯産の須恵器長頸瓶が出ているので、山王塚古墳とおなじ頃の年代が得られる。

それについで造営された熊野神社古墳も、版築工法だが川原石の葺石をほどこす。凝灰質砂岩を用いた横穴式石室の形式や、掘り込み地業を基礎工事とするのも、天文台構内古墳とおなじである。水晶玉や七曜文を刻んだ鉄地銀象嵌鞘尻金具などが出土していて、石室の平面形から 7 世紀末頃の年代が付与される。

重要なのは、これら 2 基に先行する有力な古墳が、近辺には存在しない事実である。いってみれば有力首長墓の空白地帯に、終末後期になって突然、切石切組で胴張り複室構造の両袖式の横穴式石室という北武蔵で盛行した墓室を襲う上円下方墳が、2 代にわたって造営されたことになる。

おなじ多摩川中流の右岸域にも、それらと同形式の横穴式石室をもつ終末後期古墳が 3 基、2 ～ 3 代におよんで営造される。東京都多摩市稲荷塚古墳、同臼井塚古墳、東京都八王子市北大谷古墳がそうだが、稲荷塚古墳は天皇陵古墳などに顕著な八角墳だし、北大谷古墳もおそらく多角形墳なので、左岸域の 2 基とは異なる墳形を採用している。そして、ここでも先行する有力古墳は近辺には見あたらない。

②東山道武蔵路と武蔵の終末後期古墳

7 世紀後半から末頃にかけて、多摩川中流の左・右岸域に、北武蔵から二人前後の有力首長が移住した。いかなる目的でそうした事態が起こったのか。南武蔵に突如として出現した有力首長墓の立地にひとつのヒントがある。すなわち、武蔵特有の横穴式石室をそなえた 5 基の終末後期古墳は、東山道武蔵路が多摩川と交差する渡河地点からそう遠くは離れてはいない。

各地につくられた〈見せる墳墓〉としての前方後円墳をみるかぎり、古墳時代の交通は河川交通や海上交通の水運が主流だった。南武蔵でも宝莱山古墳や亀甲山古墳など、多摩川下流域に築造された前期前方後円墳からすると、多摩川船運が人と「もの」の往来の中軸を占めていたのは推測に難くない。それと新規に建設された東山道武蔵路との交差点近く、いいかえれば陸運と水運との結節点、新旧の交通ネットワークの拠点の近辺に、7 世紀後半から末にかけて 5 基の終末後期古墳が造営される。いっぽう、北武蔵の山王塚古墳も、東山道武蔵路と入間川を視野におさめた段丘縁辺に立地して

いる。

東山道武蔵路の建設は 7 世紀後半頃とみられている。これら北・南武蔵の有力首長墓はそれとほぼ同時期に建造されるから、東山道武蔵路の建設や管理運営と密接に関与したとの蓋然性は、けっして低くはない。繰り返すならば、多摩川や入間川の船運とそれを横断する広域陸路の東山道武蔵道、水運と陸運を統一した新しい交通体系が 7 世紀後半に創設され、北武蔵の有力首長層がそれを推進した。そのなかの二人ほどの有力首長が多摩川中流域に移住し、やがてはその拠点に武蔵国府を設置する。

ここで留意しておきたいのが、北武蔵の八幡山古墳である。7 世紀中頃から後半にかけての造営にもかかわらず、直径 80m とすこぶる大型円墳なのは前記したが、推定全長 16.7m と横穴式石室も巨大である。それは前室を 2 室ともなう胴張り複室構造の横穴式石室で、緑泥片岩・角閃石安山岩・輝石安山岩・凝灰質砂岩と、多種類の切石を積む。石室下部は掘り込み地業（基壇の可能性も）がほどこされ、夾紵棺を筆頭に、鍍金銅鋲で留めた黒漆塗り木棺、鉄釘接合木棺と 3 種類の棺があって、おそらく夾紵棺に金銅八花形座金具が飾られる。さらに金銅製大刀、鉄刀、銅椀、鉄鏃、須恵器フラスコ瓶も出土している。

上円下方墳の山王塚古墳、天文台構内古墳、熊野神社古墳、八角墳の稲荷塚古墳、多角形墳の北大谷古墳、墳形不明の臼井塚古墳など、同形式の横穴式石室を共有した有力首長層の頂点に、この八幡山古墳の被葬者が聳立していたのは動かないようだ。もっとも、円墳らしいという事実がやや違和感を覚えるが、革新性と伝統性との組み合わせも、武蔵の終末後期古墳を通底する現象である。

それはともかく、上野地域と相模地域を結ぶ東山道武蔵路は、当然のことながら武蔵地域のなかだけでは完結しない。そうであれば、その建設に際して主導性を発揮したであろう北武蔵の有力首長層が、自律的な意志だけでそれを遂行したのでないことはたやすく理解される。広域道路網の整備という中央政権の政治意志にもとづくのは疑いないだろう。すなわち、中央と地方の「もの」・人の安定的な往来が 7 世紀後半につよく要請されたことが、そうした動向の背景をなすのだが、それはなにかとの問いが出てくる。

山王塚古墳を造営した有力首長は、東山道武蔵路という交通の要衝を管掌する、という重要な政治的役割をになった。その顕彰碑的な役割をはたしたのが、革新的と伝統的のふたつの要因を重層させた終末後期古墳なのである。

付記

小稿をなすにあたっては、猪熊兼勝・大脇潔・津村広志編『飛鳥時代の古墳』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館・1981 年）や森浩一編『終末期古墳』（塙書房・1973 年）をはじめ、数多くの論文や報告書を参照した。ただ、あつかった項目や古墳が多岐におよび、そしてテーマについての素描という性格もあって、省略せざるを得なかった。ご寛容をお願いする次第である。また「3　武蔵の終末後期古墳と東山道武蔵路」は、拙稿「多摩川流域の後・終末期古墳―7 世紀における東国地域の一動態―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 170 集（2012 年）の後編でもある。なお、今回の関連遺跡の踏査などについて、東国終末期古墳は池上悟、岡田賢治、東山道武蔵路は松原典明、増井有真、塚穴（来目皇子墓）古墳は高野学ら、各氏のお世話になった。記して感謝の意を表する。

(3)「東山道武蔵路」(入間道)と山王塚古墳

宮瀧交二(大東文化大学文学部教授)

1.「東海道武蔵路」(入間道)について

大宝元(701)年に大宝律令を施行し、本格的な国家建設の道を歩み始めた政府は、行政上、諸国を五畿(大和国、山城国、河内国、和泉国、摂津国)及び七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)のエリアに区分した。七道に所属した諸国の国府と藤原京、平城京は、七道と同名の直線道路によって結ばれていた。この当時、現在の川越市域は武蔵国入間郡に所属していたが、当初、武蔵国は“東山道”に所属しており、現・東京都府中市に所在した武蔵国府へは、信濃国から上野国府(現・群馬県前橋市)を経て下野国府(現・栃木県栃木市)へと続く“東山道”から南下する枝道が正式ルートとして設けられていた。この枝道には、現在、日本古代の交通史研究者からは便宜上「東山道武蔵路」という名称が与えられているが、『万葉集』にも

入間道の大家が原のいはゐ蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね(3378番)

とあるように、奈良時代には「入間道」の名で呼ばれていたようである(以下、「東山道武蔵路」は「入間道」とする)。今日、この「入間道」とみられる道路状遺構は、埼玉県吉見町天神前C遺跡から所沢市東の上遺跡を経て東京都国分寺市・国指定史跡武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡にかけて南下する複数の地点で相次いで検出されている。所沢市東の上遺跡の側溝内の土壙からは、7世紀第4四半期のものとみられる須恵器が出土しており、「入間道」は、大宝元(701)年の大宝律令施行に先行して古墳時代末には既に機能していたようである。(川越市立博物館『第41回企画展　古代入間郡の役所と道』2015年)。

その後、相模国の三浦半島から海上ルートで房総半島の上総国府(現・千葉県市原市)に通じていた“東海道”が、現・東京湾沿岸地域の乾燥化に伴って通行可能になったとみられることから、陸上ルートに改編された。これに伴って、宝亀2(771)年には、「入間道」が政府の正式な交通ルートから外され、武蔵国府は“東山道”を離れて、相模国府(現・神奈川県平塚市)から陸路、下総国府(現・千葉県市川市)へと続く“東海道”ルートに組み入れられた。しかしながら「入間道」は、政府の正式な交通ルートからは外れたものの、武蔵国の南北をつなぐ重要な交通ルートとして引き続き機能したようである。古代入間評・郡の中央を南北に貫く「入間道」は、これが政府の正式な交通ルートから外された後も、入間郡家を中心とした地域の交通体系にあっては、文字通り「幹線道路」として重要な役割を果たし続けたとみてよいであろう。

10世紀末から11世紀初頭に成立したとみられている清少納言が著した随筆『枕草子』の168段には「井はほりかねの井」と記されており、現・埼玉県狭山市に所在する埼玉県指定文化財「堀兼之井」が登場する(現在の「堀兼之井」が『枕草子』に登場する「ほりかねの井」であるか否かについては諸説あるところであるが、同じく狭山市に所在する埼玉県指定文化財「七曲井」をはじめとして、武蔵野台地を擂り鉢状に深く掘った特異な形態の井戸のいずれかであることについては異論がないところである)。すなわち、清少納言自身が武蔵国を訪れたとは考えられないものの、「入間道」は、10世紀末から11世紀初頭にあっても中央の官人たちが往還する主要幹線道路として機能しており、彼等が見た「ほりかねの井」という特殊な形態の井戸は、平安京にもその名が知られていたということ

であろう。

２．古墳時代の在地豪族と古代交通路

こうした古墳時代に遡る古代交通路を中央政府の意向を受けて実際に建設し、維持・管理していたのは、まぎれもなく、その沿線地域の政治･経済を掌握していたであろう国造クラスの地元豪族（在地首長層）であったと思われる。彼等は、乙巳の変・大化の改新に代表される７世紀中葉の一大政治改革期には、後の養老選叙令郡司条にも

> 凡郡司。取性職清廉。堪時務者。為大領少領。強幹総敏。工書計者。為主政主帳。其大領外従八位上。少領外従八位下叙之。其大領少領。才用同者。先取国造。

とあるように、地方行政機構の末端である「評」の実務を担った評司に就任し、更に大宝元（701）年以降は、この「評」を改組した郡の実務を担う地方官人であった郡司に任命されて、従来からの地域支配を継続して担う存在であった。地域社会における彼等の地位は、経済活動、とりわけ農業経営と、陸上交通や河川・海上交通を掌握しての交易活動を基盤としていたのであり、国家的大動脈であった七道の建設と維持・管理はもとより、各「評」の役所（「評」家）をつなぐ伝路の建設と維持・管理は不可欠であった。その古代交通路を建設し、維持・管理するに際して不可欠な土木測量技術は、言うまでもなく古墳時代以来の古墳の造営や古墳に代わる権威の象徴となった寺院の造営等によって培われたものとみて相違ないであろう。

３．上円下方墳の被葬者像

さて、山王塚古墳の性格（被葬者像）を考えようとする際、東京都府中市西府町に所在する同じ上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳の存在を看過することは出来ない。出土した方頭大刀の鞘尻金具の年代から、７世紀後半の築造とみられているこの古墳の被葬者像については、

①上円下方墳という特殊な墳形や版築技術の駆使は、近畿地方の中央政権との密接な関係を考えざるを得ない。

②方頭大刀は、頭椎大刀や円頭大刀、圭頭大刀に替わって登場し、その年代は概ね官位十二階が制定され官僚システムが整備された時期に相当するところから、古代国家形成期に朝廷が地方の官僚層に身分表象として与えたものとする見解もある。

といった点から、「官僚へと姿を変えつつあった地方の豪族」と結論されている（府中市郷土の森博物館『府中市郷土の森博物館ブックレット８　あすか時代の古墳　検証！　府中発見の上円下方墳』）。

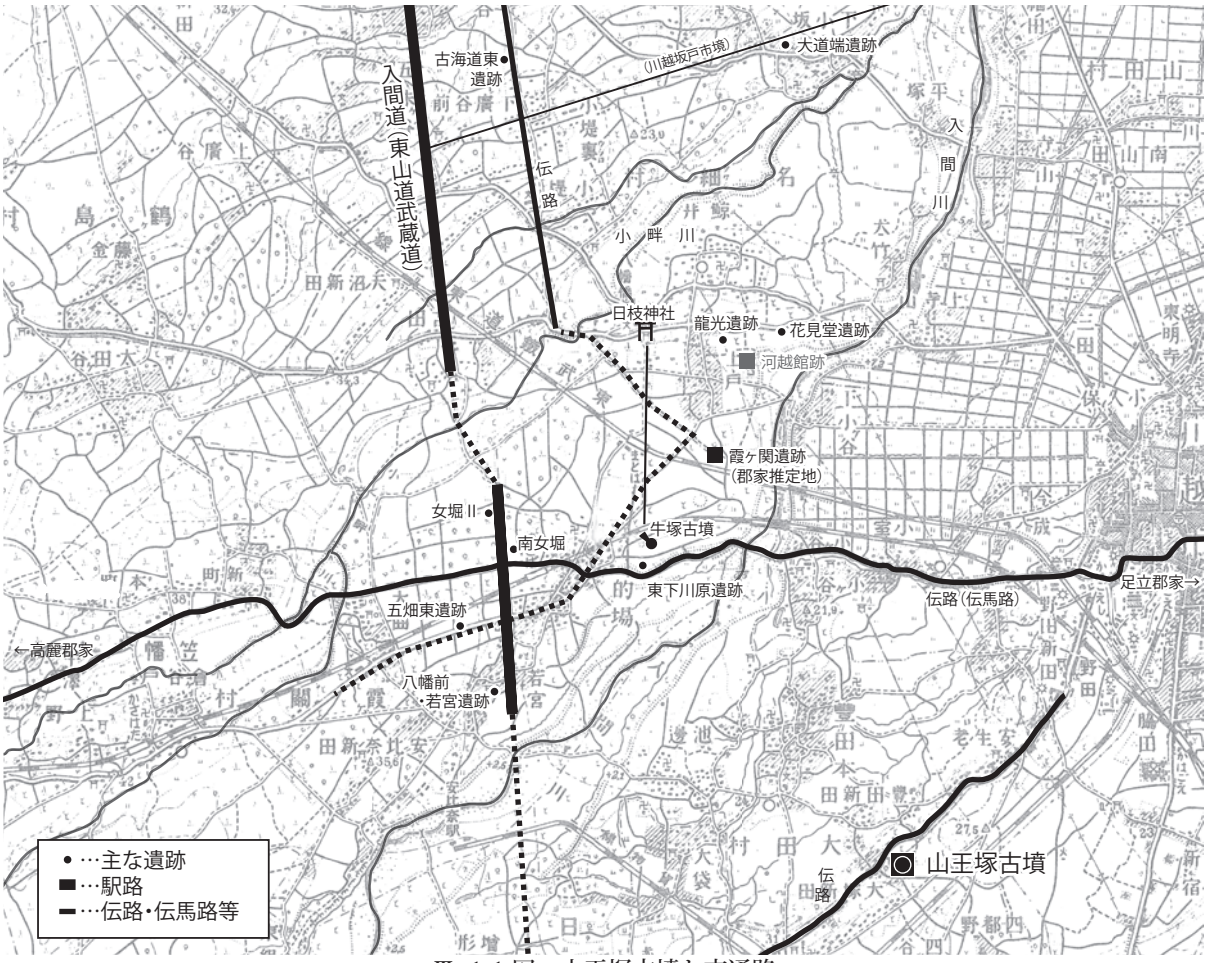
この「官僚へと姿を変えつつあった地方の豪族」とは、武蔵府中熊野神社古墳の場合、この地が後に武蔵国府が整備・完成する場所であるという点を考えれば、基本的に中央派遣であった国司とともに武蔵国の国政を担った有力豪族を想定せざるを得ない。武蔵国府には多磨評家・郡家も併置されていたとみられているが、やはり多磨評司・郡司層とみるよりは、国政に連なる有力豪族とみるのが妥当であろう。

４．山王塚古墳の被葬者像

以上の点から、山王塚古墳の被葬者像を考えた場合、やはり、先にみたように“東山道”と武蔵国

府をつなぐ枝道である「入間道」が入間郡の中央を南北に貫いていたことを考えれば、入間評司クラスの有力な豪族を想定せざるを得ない。同じ上円下方墳を築造した武蔵国府の官人とも「入間道」を通じて密接な関係にあり、その一方で、“東山道”によって中央政府とも通じていた人物が、その被葬者（築造者）であったことは間違いのないところである。

山王塚古墳の築造より 1 世紀も後の史料になるが、天平宝字 8（764）年に生じた恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱の鎮圧過程で活躍した人物に授刀・物部直広成がいる。授刀は、令外官である授刀衛に勤務する舎人（天皇・皇族に近侍し主に護衛を任とした下級官人）であり、主に郡司層の子弟が多かったが、武蔵国入間郡出身の広成は、入間郡司家の出身とみられている。広成は、恵美押勝の乱の功績により、神護景雲 2（768）年 2 月に入間宿禰を賜姓されたことはこの点を裏付けるものであろう（森田悌『武蔵の古代史　国造・郡司と渡来人・祭祀と宗教』さきたま出版会、2013 年）。入間宿禰広成は、山王塚古墳の被葬者の末裔かもしれない。



Ⅲ -1-1 図　山王塚古墳と交通路

（4）各地の上円下方墳と山王塚古墳

池上悟（立正大学文学部教授）

1

古墳の墳形は、基本的には築造された墳丘の形状によって命名されてきた。古く江戸時代の文化年間に『山陵志』を著した下野出身の蒲生君平は、山陵すなわち歴代天皇の陵をして、その形状を遺体を墓所に運ぶ宮（柩）車を模倣した形状と認識し、「下至敏達凡二十有三陵制略同焉。凡其営陵因山従其形勢。所向無方大小高卑長短無定。其為制也必象宮車而使前方後圓為壇三成且環以溝」として「前方後円」の名称を付している。

しかしながら「前方後円墳」という名称の普及は大正時代以降であり、明治時代には天皇陵と区別して類似する形状の古墳は、坪井正五郎などによって「瓢形古墳」という名称が使用されてきた。

一方類似した名称である「前方後方墳」は、前方後円墳という古墳名称の存在を前提として考案されたものであり、出雲の野津左馬之助は、前方後円墳から方墳に移行する過程で現出した特異な形状の古墳と位置づけている。

古墳の主体をなす円形墳丘の円墳は、古く傘形などとも称せられてきたが、前方後円墳の名称普及時にあわせて一般化しており、方形古墳すなわち方墳も同様である。

「上円下方墳」という古墳の名称は、大正初年に確認される。平面方形の墳丘の上に円形の墳丘を重ねた形状を基とする命名であるが、これが確認時点の墳丘状況をもとにしたものであり、多数の古墳が可能性あるものとして報告されてきた。しかしながら単に視覚上での認識であり、その墳丘形状の要因にまで顧慮したものではなかった。

特に方形基壇上に円系墳丘を築造した京都市山科に所在する天智天皇陵（御廟野古墳）と、奈良県明日香村に所在する天武天皇陵（野口王墓古墳）は、上円下方墳の代表例として扱われてきた経緯があるが、昭和 57 年に白石太一郎の検討により八角形墳として上円下方墳から峻別された。

ここでの２陵墓の上円下方墳という認識は明治維新後に重視され、明治 45 年に崩御された明治天皇の御陵である京都市伏見に造営された伏見桃山陵は、上円下方墳として築造されている。この伝統は東京都八王子市の武蔵陵墓地に造営された、大正天皇の御陵である多摩陵、昭和天皇の御陵である武蔵野陵に厳粛に継受されている。

しかしながら、上円下方墳の確定は発掘調査による確実な墳形認定が前提となるものであり、昭和 54 年に実施された奈良県・石のカラト古墳を嚆矢とする。しかしこの古墳の調査報告書の刊行は平成 17 年であり、内容の周知は大きく遅れた。

その後は、昭和 61 年に静岡県沼津市の清水柳北一号墳の調査が行われ、報告書は平成２年に刊行されている。平成 15 年には東京都府中市所在の熊野神社古墳の発掘調査が実施され、報告書は平成 17 年に刊行された。三鷹市・天文台構内古墳は平成 18 年から継続調査され、報告書は平成 23 年に刊行された。福島県白河市に所在する野地久保古墳は平成 20 年に調査が行われ、平成 22 年に報告書が刊行されている。

これらの先行調査を踏まえて埼玉県川越市所在の山王塚古墳の調査が行われたものであり、確実な６基目の上円下墳として認識されるものである。

2

今回の**山王塚古墳**の調査により、古墳規模は明確になった。確認できた規模は、下方部の東西長56.3m、南北長 59.2 ～ 57.6m であり、やや北開きの、東辺と北辺が僅かに張り出す南北方向に長い形状を確認できる。また方形壇上に築造された円形墳丘は、南側が墳丘上に祀られた小社の参道の変形により南側に流れており、北西側が一部直線状を呈する部分も認められるが、試掘坑の掘り下げにより確認できた直径は、ほぼ 37m と復元することができる。

確認できた周溝幅は、おおむね 15 mであるが、南側は 19 mを超える。これは正面である南側を重視した古墳築造の結果と思える。即ち山王塚古墳は、下方部一辺 56 m、上円部 40 m規模として企画されたものと確認できる。

この下方部一辺 56m と上円部 37m の比率は、他の上円下方墳の築造企画として復元できる 1：√２企画には合致していない。1：√２の企画は、下方部の四角形の対角線長さの二分の一を上円部の直径とするものであり、正方形に内接する円形の直径と外接する円形の直径の関係でもある。

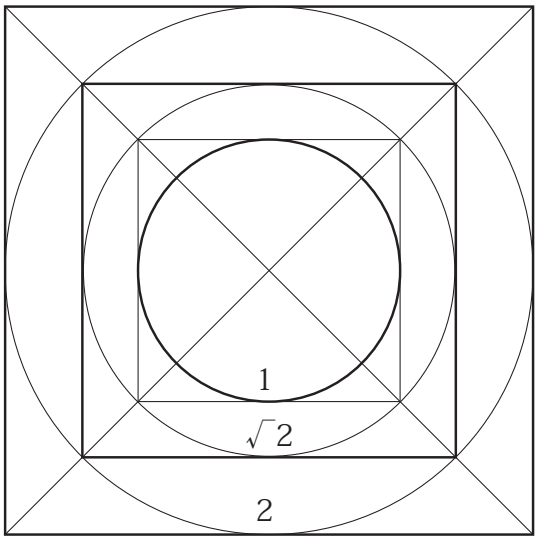
現在確認できる６基の上円下方墳は、既往の検討により、すべて下方部辺長と上円部直径の規模の関連は１：√２である点が明らかになっている。すなわち極めて厳格な企画のもとの古墳築造が考えられるものである。

上円下方墳の築造企画について、最初に論究されたのは**清水柳北１号墳**の報告である。この古墳は上円部直径 900cm、下方部は二段でそれぞれ一辺 1270cm と 1590cm、周溝外側は一辺約 2000cm である。この数値を 30cm を基準尺度として、30 尺、42 尺、53 尺、66 尺に復元して、比率は５：７：９：11 で企画されたものと想定している。

次いで平成 17 年の**石のカラト古墳**の報告で高橋克壽は、下方部辺長の四分の一の 345cm を基準とした方眼に基づいて古墳築造が企画されたものと想定した。上円部の半径は一辺 345cm の正方形の対角線の長さである 345cm ×√２に一致しており、上円部直径と下方部一辺の長さの関連は、1：√２ということとなる。

平成 21 年には**府中熊野神社古墳**の企画について、上円部直径 16 m、２段の下方部一辺それぞれ 23 mと 32 mの関連を、正方形に内接する円弧と外接する円弧の関係、すなわち１：√２：２である点が明確にされている。

東京都三鷹市所在の**天文台構内古墳**の方形の周溝で区画された下方部は、傾斜する南側のみに僅かに盛土する程度であり、明確な墳丘としては築造されてはいない。この方形区画の周溝に囲繞された墳丘第１段の平坦面の規模は、南側 2630cm、北側 2700cm、東側 3180cm、西側 2730cm であり、北東部分が突出変形してはいるものの、１辺 2700cm を基本とする正方形の平面形が企画されたものと想定することができる。上円部の直径はほぼ 19 mと確認できる。この古墳における下方部の１辺の長さ



Ⅲ -1-2 図　上円下方墳の築造企画

27 mと上円部直径 19 mとの関連は、√２：１であり、企画上の比率に合致している。

野地久保古墳は、奥州の南端の白河の地に位置する。東に張り出す尾根の先端に立地しており、果樹園の造成により上部を大きく削平され、下方部の一辺を破壊されている。埋葬施設は安山岩質凝灰岩を組み合わせた横口式石槨であるが、底石のみが原位置を保って遺存している。上円部は完全に削平されていたが、基底の円形葺石により規模を確認できる。下方部は斜面を含めて全面葺石が施されている。上円部径と下方部一辺長は 1034cm と 1400cm の１：√２であり、基本企画に合致する。

山王塚古墳は、以上に概略を記した上円下方墳の築造企画とは若干の差異を明示するものの、基本は下方部南側正面の幅の 56m を基準とすれば当初の築造意図は上円部直径は 40m であったと思える。施工時の誤差として、上円部墳丘盛土の省略による結果としての直径 37m が考えられよう。

以上に確認できた各上円下方墳は、それぞれに所産時期を異にしている。最古の年代は東京都府中市所在の**熊野神社古墳**で７世紀中頃と想定される。熊野神社古墳の内部主体は南武蔵地域の終末期古墳に特有な軟質の泥岩を石材として使用した複室胴張り構造の横穴式石室である。

東京都三鷹市所在の**天文台構内古墳**からは、複室胴張り構造の横穴式石室の奥室から須恵器のフラスコ形提瓶と土師器の坏が２個体出土している。フラスコ形提瓶は東海産の儀礼用として使用されたものであり、丸い胴部と細長い頸部を特徴とするものである。土師器坏は比企型の系譜をひくものであり、合わせて７世紀代第３四半期頃の年代が考えられるものである。天文台構内古墳は、すべての点において熊野神社古墳を規範として築造されたものと考えることができるものであり、熊野神社古墳がやや先行して築造されたものと考えられる。

静岡県沼津市に所在する**清水柳北一号墳**の埋葬施設は墳頂に安置されていたものと考えられる石櫃と想定され、八世紀前半代に築造された火葬墳墓である。

奥州南端に位置する**野地久保古墳**の埋葬施設は、横口式石槨である。遺存した底石から石槨内部幅 130cm、奥行き 180 ～ 190cm、高さ 80 ～ 90cm と復元され、成人の伸展埋葬が可能な規模である。隣接して所在する谷地久保古墳の主体部は小形化した横口式石棺、幅 125cm、奥行き 140cm、高さ 115cm であり、火葬骨埋納ないしは改葬が考慮される規模である。谷地久保古墳との比較から野地久保古墳の所産時期は７世紀の第４四半期頃の年代が考えられる。

石のカラト古墳は畿内に所在する唯一の上円下方墳であり、様々な被葬者が想定されている。宝亀元（770）年に崩御された称徳天皇、あるいは霊亀元（715）年に崩御した天武天皇第４皇子の長親王などが想定されてはいるが、少しく年代が新し過ぎるようである。内部主体は幅 104cm、長さ 260cm 規模の横口式石槨であり、畿内の横口式石槨他例との比較では、７世紀第４四半期の築造とするのが穏当であろう。

即ち上円下方墳は、７世紀の後半代を主体として８世紀に及ぶ期間に地域を限定して築造されている点を確認できる。従って山王塚古墳もこの期間内部の築造と考えられる。

山王塚古墳からは、埋葬主体である横穴式石室の閉塞部から「ハ」の字状に開く敷石を施した墓前域部分が確認され、この部分から複数個体の須恵器片が出土している（Ⅱ -3-1 図）。1 に小形を特徴とする肩部の稜が顕著な単純口縁の平瓶、他は３個体のフラスコ形細頸瓶である。

フラスコ形細頸瓶は、２は頸部から球形の胴部にかけての遺存、３は口縁部のみの遺存するもの、４は口縁部を欠損するものである。総体として胴部は高さよりも横幅がまさる形状であり、頸部は中

央に２条の沈線を巡らせ口縁部直下には突帯を巡らす特徴を有する。所産時期は７世紀の中葉と考えられるものであり、古墳築造年代の上限を画するものと位置けづけられよう。

限定された範囲ではあったが、調査によって確認された埋葬施設は角閃石安山岩を石材として組み合わせた複室胴張り型の横穴式石室と考えられ､施設の入り口部に緑泥片岩の板材を使用している。

また石室閉塞部からは須恵器の小形平瓶の破片が出土しており、ほぼ７世紀後半代の所産と思えるものである。

南武蔵地域に所在する３基の上円下方墳の墳丘規模は、山王塚古墳が一辺 56 m、熊野神社古墳が 32 m、天文台構内古墳が 27 mと山王塚古墳が突出している。被葬者の生前の勢力が古墳規模に直截的に反映するのであれば、７世紀後半代の最有力古墳としては山王塚古墳ということになるが、古墳総体としては最有力古墳として認識することはできない。

熊野神社古墳は、上円部および２段の下方部の全面に扁平石が葺かれており、多大な労力の投入が考えられ、石室の基底部には版築工法を用いるなどの手間がかけられている。また現状では周囲を囲遶する周溝は確認されてはいないが、一辺 32 mを測る下方部の両側には「土取り穴」と称せられている幅 30 m以上深さ２m以上の掘り下げ部分が確認されており、これを墳丘の両側のみに施された周溝と位置づければ、古墳の兆域としての幅は 100 m近くとなる。

山王塚古墳の墳丘は上円下方墳としては本邦最大規模を誇るものの、上記の視点および古墳の立地を勘案すると熊野神社を上回る勢力の築造した古墳として位置づけることは困難と思える。

武蔵の３基と奥州南端の１基の上円下方墳には共通した要素を確認することができる。埋葬施設前面の墓前域（前庭部）の両側に「ハ」の字状に広がる側壁を河原石積みとする点である。従前の調査で、熊野神社古墳、天文台構内古墳、野地久保古墳で確認されていたが、山王塚古墳でも想定されるところである。しかしながらこの様相は上円下方墳に限定されるものではなく、上野の総社古墳群中の蛇穴山古墳、上総の内裏塚古墳群中の割見塚古墳、下総の龍角寺古墳群中の岩屋古墳などにも石材を換えて認められるところであり、終末期の地域首長墓に特徴的な事象である。

また武蔵の３基の上円下方墳は、いずれも胴張り複室石室を埋葬施設として構築している点が明らかとなった。胴張り石室は、北武蔵地域においては行田市酒巻古墳群中の６世紀後半代の事例を最古としており、前方後円墳体制の終焉後に地域に拡散している。南武蔵地域においては川崎市の第六天古墳の７世紀初頭以降に在地に定着している。

胴張り石室は群集墳の埋葬施設として導入されており、地域首長墓に採用された横穴式石室構造とは異なっている。武蔵最大規模の埼玉古墳群において確認される横穴式石室は６世紀末葉の将軍山古墳に構築された片袖型石室であり、当該期に広く関東地方の有力前方後円墳に採用されている。次期の埼玉古墳群中の首長墓の横穴式石室の様相は明確ではないが、７世紀前半代の首長墓としての直径 80m の円墳である八幡山古墳には大型の胴張り複室石室が採用されており、胴張り石室の位置づけが昇華した点が確認される。前方後円墳体制から総体としての方墳体制への移行に伴う変革と理解されるものではあるが、東国においても稀有な事例である。

上野地域および下野地域においては長方形平面ないしは矩形平面石室が首長墓に採用されており、終末期群集墳に胴張り石室が構築されており、房総地域における胴張り石室は僅少例が小形古墳に認められるのみである。

現状では上円下方墳６基中の３基が武蔵地域の南部に集中しており、その意義が追及されなければならない。３基の上円下方墳は、武蔵南部の内陸部に南北に走行した東山道武蔵路に沿って築造されている。熊野神社古墳は国府に近接して所在しており、山王塚古墳は武蔵路に沿う位置に当たる。

７世紀前半代における武蔵の覇権は北部埼玉周辺勢力が掌握したところであり、その証左は直径80 m規模の八幡山古墳の存在に顕示される。この地域首長墓の築造以後に、特徴的な上円下方墳の存在に明示される如くに地域の覇権は南武蔵勢力に移ったことが想定される。

この７世紀中頃には、地域有力集団の墓制としての横穴墓の形態が矩形平面横穴墓に転換している。この横穴墓の形態は、上円下方墳の埋葬施設としての複室胴張り構造の横穴式石室が、従前から昇華して第一級の位置づけが果たされ、新たにこの下位に位置づけられた矩形平面の横穴式石室を規範としたものと想定される。この矩形横穴墓の分布は南武蔵を主体として、武蔵野台地の縁辺沿いに北武蔵まで及んでおり、熊野神社古墳を中枢とし、山王塚古墳と天文台古墳が補佐した上円下方墳体制の波及した範囲、即ち有力麾下集団の分布を示すものと理解される。

【参考文献】

池上　悟「上円下方墳の名称と築造企画」『白門考古論叢Ⅱ』中央考古会　平成 20 年

池上　悟『古墳文化論攷』 六一書房　平成 22 年

池上　悟「上円下方墳築造企画の導入と展開」

『考古学論究』立正大学考古学会　第 14 号　平成 24 年

池上　悟「武蔵地域における展開期横穴墓の一様相」

『立正大学大学院文学研究科紀要』第 29 号　平成 25 年

（5）武蔵国の官衙・古代寺院と山王塚古墳

平野寛之（川越市立博物館）

１．武蔵国の官衙

山王塚古墳と官衙の関連を考察するにあたり、大宝律令制定（701）に伴う国・郡・里制施行前のいわゆる評制段階において、武蔵国の事例としては榛澤評家（深谷市熊野遺跡）が一定の指標となる。初期の榛澤評家は７世紀第３四半期頃に成立し、大型の総柱掘立柱建物を中心的な建物とし、首長層による儀礼行為に使用されたと思われる瓢箪形の石組み井戸のほか、鍛冶工房などが検出されている。

山王塚古墳が位置する入間評では、入間川中流域左岸の入間台地東端部の川越市霞ヶ関遺跡とその隣接遺跡が評家の最有力比定地となっている。ここでは８世紀第１四半期以降（郡家段階）の掘立柱建物が官衙的なコ・ロ字型の配置で検出されている。これらに先行する７世紀後半の大型総柱掘立柱建物跡及び、平面瓢箪形の井戸など、榛澤評家の事例と規模・構造が類似した遺構を有することから、これらが入間評家段階の中心的な遺構と考えられている。出土遺物について注目すると、入間評家（郡家）では７世紀末～８世紀前葉にかけて東海産須恵器に次ぐ比率で上野産須恵器が一定量出土しており、当初から土器の産地組成において上野方面からの影響を強く受けていることがわかる。７世紀後半という時期は、折しも上野国の東山道本道から武蔵国府までを結ぶ駅路として東山道武蔵路が整備された段階である。武蔵国内の上野産須恵器は武蔵国北端域及び河川による搬入が想定される地域を除くと、入間評家と東の上遺跡（駅家と推定）の出土点数が突出しており（富田 2008）、入間評家の西約 1.5km を走る東山道武蔵路経由で搬入された可能性が指摘できよう。

２．官衙と終末期古墳

次に官衙と終末期の古墳との関連に注目したい。榛澤評家の場合、立地する櫛引台地に地域最大規模の古墳が営まれる在地首長層の伝統的な勢力基盤があり、その後を継ぐように榛澤評家が整備されている。一方で入間評家が置かれた地域は入間川中流域左岸の入間台地東端部に的場古墳群が存在するものの、後に勝呂廃寺が造営される入間台地北端（坂戸台地）の古墳群をはじめ、入間郡とされる地域に複数の古墳群が散在し、郡域内に複数の豪族が割拠していた状況がうかがえる。山王塚古墳の属する南大塚古墳群は入間評家からは入間川とその広い沖積低地を挟んだ対岸約３km の位置関係にあり、地理的には入間評家と山王塚古墳の間に直接的な連続性を確認することは困難であるといわざるをえない。つまり、山王塚古墳が入間地域における終末期古墳の中で突出した規模と墳形の特殊性を有するにもかかわらず、そのお膝元である入間川右岸の武蔵野台地に評家が置かれなかった。

７世紀後半の入間地域は、山王塚古墳を擁する南大塚古墳群を含め、各地に古墳群を築いた勢力が割拠し、競合関係にあったと言える。入間評家の成立は、物流の要となる入間川に接し、新規開削された東山道武蔵路を至近に臨む、武蔵国中央部の交通結節点という地理的性格が重視され、各豪族の勢力範囲の緩衝地帯としてこの場所に評家が設置されたと考えられる（黒済 2008・平野 2008）。

３．武蔵国の古代寺院

武蔵国での寺院造営は、７世紀前半～中頃に寺谷廃寺（滑川町）から始まるものの、明確な寺院

遺構は未確認である。伽藍が確認された中では勝呂廃寺（坂戸市）が 7 世紀後半に建立されている。7 世紀後半に成立したと考えられる武蔵国内の古代寺院としては、いずれも伽藍は未確認であるが、西別府廃寺（熊谷市／幡羅評）、馬騎の内廃寺（寄居町／榛澤評）、小用廃寺（鳩山町／入間評か）、影向寺廃寺（川崎市／橘樹評）、深大寺（白鳳仏が伝わる）等が挙げられる。これら初期寺院の瓦は、上野国の影響を強く受けて造られていると考えられている。評家近郊に位置する寺院が多い理由として、古墳時代の地域首長の流れを汲んだ各地域の評督等の階層によって造営された氏寺的な寺院であるため、結果として古墳・官衙・寺院が同一地域に確認されているものと思われる。

終末期の古墳との関係では、寺院の基壇を造る技術と、古墳墳丘築造に使用される版築技法及び石室下の掘込地業との共通性が注目される。これらは古墳築造に必須の技術ではないため、中国からもたらされた最先端の寺院築造技術を採用することに意味が見出されていたと考えられる。

4. 山王塚古墳と官衙・古代寺院の関係

山王塚古墳が築造された 7 世紀後半における武蔵国の主要な終末期古墳とともに、当該期の古代寺院と評の位置（評家の位置がある程度判明しているものについては、評家の位置）を落とし込んだものがⅢ -1-3 図である。以下はⅢ -1-3 図を元に述べたい。

7 世紀後半の武蔵国では、これまでの河川流域に豪族首長が分布する古墳時代的な領域から、新たに開削された東山道武蔵路を南北の軸とし、河川と交わる陸上交通と水上交通の結節点に政治的な軸足が移りゆく傾向がみられる。南武蔵では多摩川と東山道武蔵路の交点に上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳が築造され、後に多磨評家や武蔵国府が整備される。北武蔵の入間川と東山道武蔵路の交点には入間評家が整備され、評家の対岸に山王塚古墳が築造される。天文台構内古墳は東山道武蔵路からやや離れるが、おおむね武蔵で上円下方墳と確定する古墳はいずれも陸上交通と水上交通の結節点を臨む位置に築造されている。また、掘込地業や版築技法といった寺院建築由来の技術を用いた古墳、そして古代寺院についても、東山道武蔵路の沿線に集中し、そこから外れる古墳や寺院も東山道武蔵路と結節する河川流域に所在する傾向がうかがえる。

上円下方墳を築造した首長は中国思想に由来する墳形の選択や版築・掘込地業等の最新の土木技術を導入しえた事実により、畿内中枢との直接的な強い繋がりが想定される。彼らは評家の設置や東山道武蔵路の開削といった広範な地域の首長たちとの調整が必要となる国家的な事業において、畿内中枢と在地の諸勢力との仲介役となり主導してきた存在と推定できるのではないだろうか。律令国家の成立に向けた動きの中で地域経営を主導する立場であるならば、墓域を含めた自身の勢力基盤を新たな官衙の候補地へ移転する、あるいは東山道武蔵路を臨む位置に上円下方墳を築造するのは、必然的な事象といえよう。同様に初期の古代寺院（氏寺）が同様の分布を示す背景にも、水陸の交通結節点を掌握し、地方官衙の官人へと再編されてゆく首長が氏寺として造営したことを示唆している。

山王塚古墳は入間評家から入間川を挟んだ対岸約 3km とやや離れた位置になるものの、前記のとおり各豪族の緩衝地帯かつ、入間川水運と東山道武蔵路の結節点に入間評家が置かれたとするならば、その築造者一族の本拠・墓域と評家が隔絶していたとしても、一概に関係性を薄くみなすことはできない。山王塚古墳の築造者は畿内中枢との密接な繋がりを有し、東山道武蔵路開削など律令国家の基盤整備に貢献しながらも、地域で突出した第一の勢力ではなかった。水系ごとに豪族首長が割拠する

入間地域において、競合する他の豪族首長へのアドバンテージを内外へ示す意味も込めて、上円下方墳という墳形を選択したものと思われる。おそらく、結果的には入間評の評督クラスの地位を務めることになったのではないだろうか。

参考文献

川越市教育委員会・川越市遺跡調査会　1997 『山王塚脇遺跡　第一次～第三次発掘調査報告書』川越市遺跡調査会報告書第 20 集

川越市教育委員会・川越市遺跡調査会　2013 『市内遺跡Ⅱ』川越市遺跡調査会調査報告書第 44 集

黒済和彦　2008 「古代入間郡における終末期古墳の様相と評・郡家の成立」『論叢　古代武蔵国入間郡家―多角的視点からの考察―』 古代の入間を考える会

黒済和彦　2005 「埼玉県における前方後円墳以後と古墳の終末」『シンポジウム　前方後円墳以後と古墳の終末』第 10 回東北・関東前方後円墳研究会大会資料

黒済和彦　2016 「古墳時代終末期の武蔵―基礎的資料の提示―」古代武蔵国研究会　定例会レジュメ

埼玉県教育委員会　1976 『日本住宅公団（川越・鶴ヶ島地区）埋蔵文化財発掘調査報告　鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第８集

（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985 『鶴ヶ丘（Ｅ区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 45 集

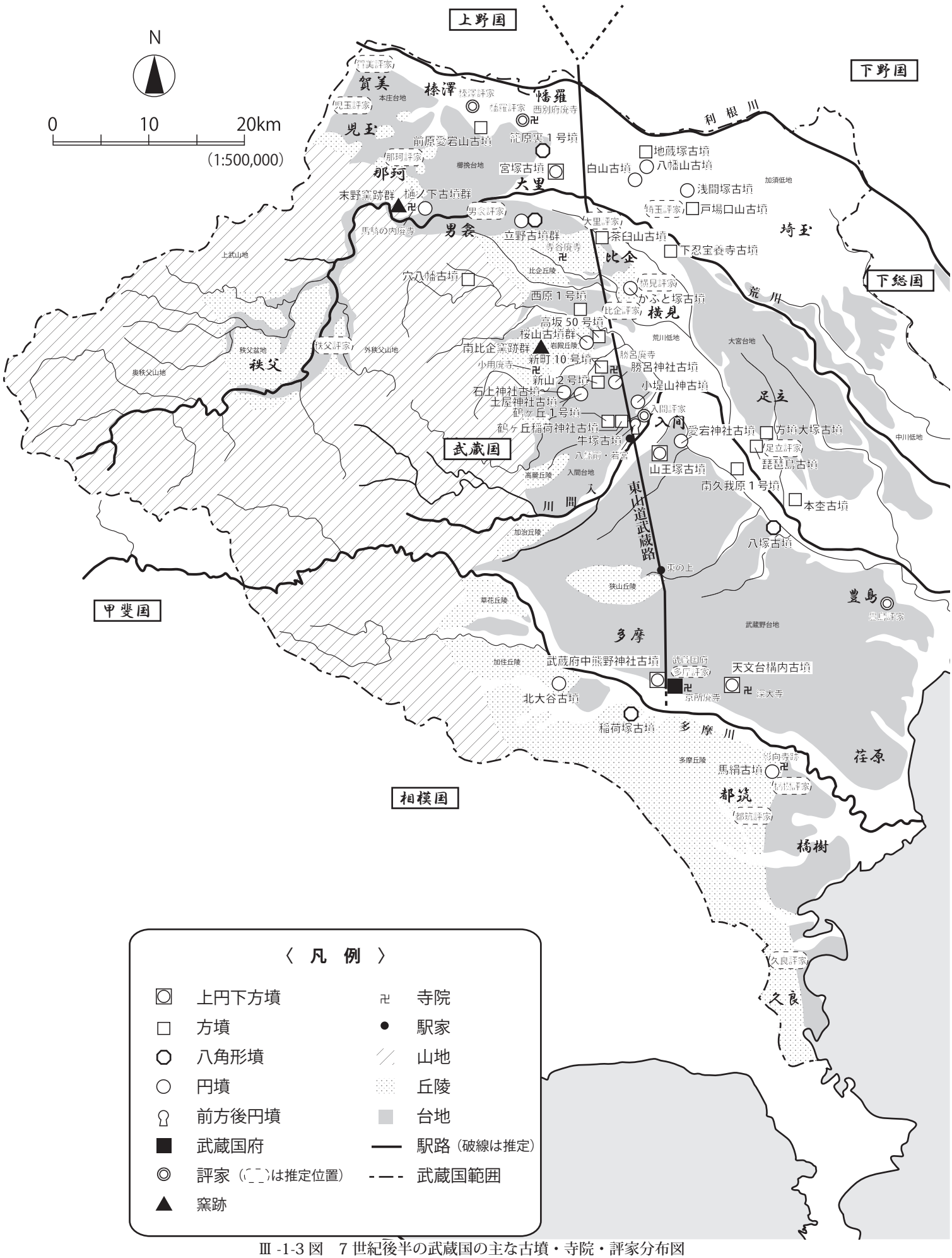
富田和夫　2006 「北武蔵における他国産須恵器の流通とその実態―上野産須恵器を中心に―」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊６　埼玉考古学会

富田和夫　2008 「霞ヶ関遺跡群出土の上野産須恵器をめぐって」『論叢　古代武蔵国入間郡家―多角的視点からの考察―』 古代の入間を考える会

平野寛之　2008 「古代入間郡家の復元に向けて―川越市霞ヶ関遺跡群の再検討―」『論叢　古代武蔵国入間郡家―多角的視点からの考察―』 古代の入間を考える会

府中市教育委員会・府中市遺跡調査会　2005 『武蔵府中熊野神社古墳』府中市埋蔵文化財発掘調査報告　第 37 集

三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会　2011 『天文台構内古墳Ⅰ　東京都三鷹市大沢　天文台構内古墳再確認調査報告書』三鷹市埋蔵文化財調査報告　第 33 集



Ⅲ -1-3 図　7 世紀後半の武蔵国の主な古墳・寺院・評家分布図

第２節　現在の山王塚古墳

（1）山王塚古墳の植生について

牧野彰吾（川越市文化財保護審議委員）

平成 28 年 6 ～ 8 月山王塚古墳のフロラ（植物相）及び毎木調査を実施した。フロラとは、区域内に生育する全植物のリストである。67 科 157 種を記録した。内訳は在来種（史前帰化種 12 種を含む）114 種、植栽を含む外来種 43 種である。史前帰化種と呼ばれるものは弥生時代、大陸からの農耕文化の伝来とともに来日した種とされており、約 2000 年を経て在来種として認められるものである。種数における外来種の占有度は 27.4％であった。この占有度は平地の雑木林としてごく平均的な数値であるといえる。

全 157 種中、木本は 67 種であった。残りはつると草本である。木本について胸高直径（人の胸の高さにおける直径）が 3cm 以上のものは 38 種 626 株（株立ちは 1 株扱い）あり、これらの毎木調査を実施した。Ⅲ -2-1 表、Ⅲ -2-1 図は種別に積算胸高断面積をもとめ降順に示している。またⅢ -2-2 図は樹木の位置関係を示している。

山王塚植生の代表樹木は積算胸高断面積の大きい順にコナラ、スギ、ヒノキとなる。しかし 3 種ともほぼ同じ数値を示している。スギとヒノキは戦後の植栽によるものであろう。スギは上円部内に集中する。コナラはほとんどが下方部にある。ヒノキは上円部と下方部との境にあり、境木として使われていた可能性がある。これら 3 種は量的には同等だが、分布は 3 様の特徴をもつ。

株数が少なく大径木が目立つ種としてソメイヨシノ、クヌギ、ウワミズザクラ、ヤマザクラがある。ソメイヨシノは上円部の頂部に局在し生活慣習との関わりが想定される。クヌギはコナラとともに関東一円に広がる雑木林の代表的優占種である。ウワミズザクラとヤマザクラは日本固有種である。大切にしたい。

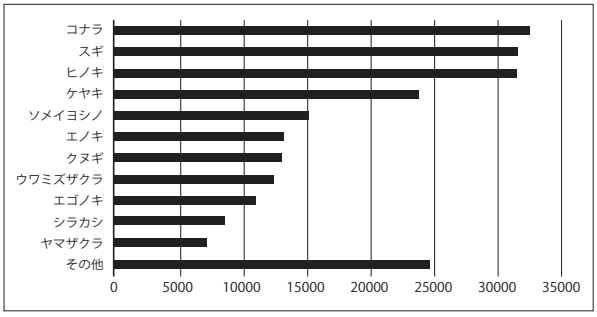
ケヤキ、エノキ、エゴノキは雑木林の汎在種である。

積算胸高断面積 10 位となるシラカシは極端に株数が多く、また 1 株あたりの平均胸高断面積は 44cm^2 となり小径木ばかりである。このシラカシは上円部と下方部北東部に集中する。それ以外の下方部にはほとんどない。雑木林は一般に管理されている林では落葉樹が多く、人手が加わらなくなると自然遷移によってシラカシのような常緑樹の成長が旺盛になる。山王塚の場合、上円部やその後方（北東部）は信仰の対象として手が加わらなかったため、または放置によりシラカシが多く生育しているものと考えられる。しかしいずれも小径木であることから、手が加わらなかった期間はあまり長くはないと推測される。

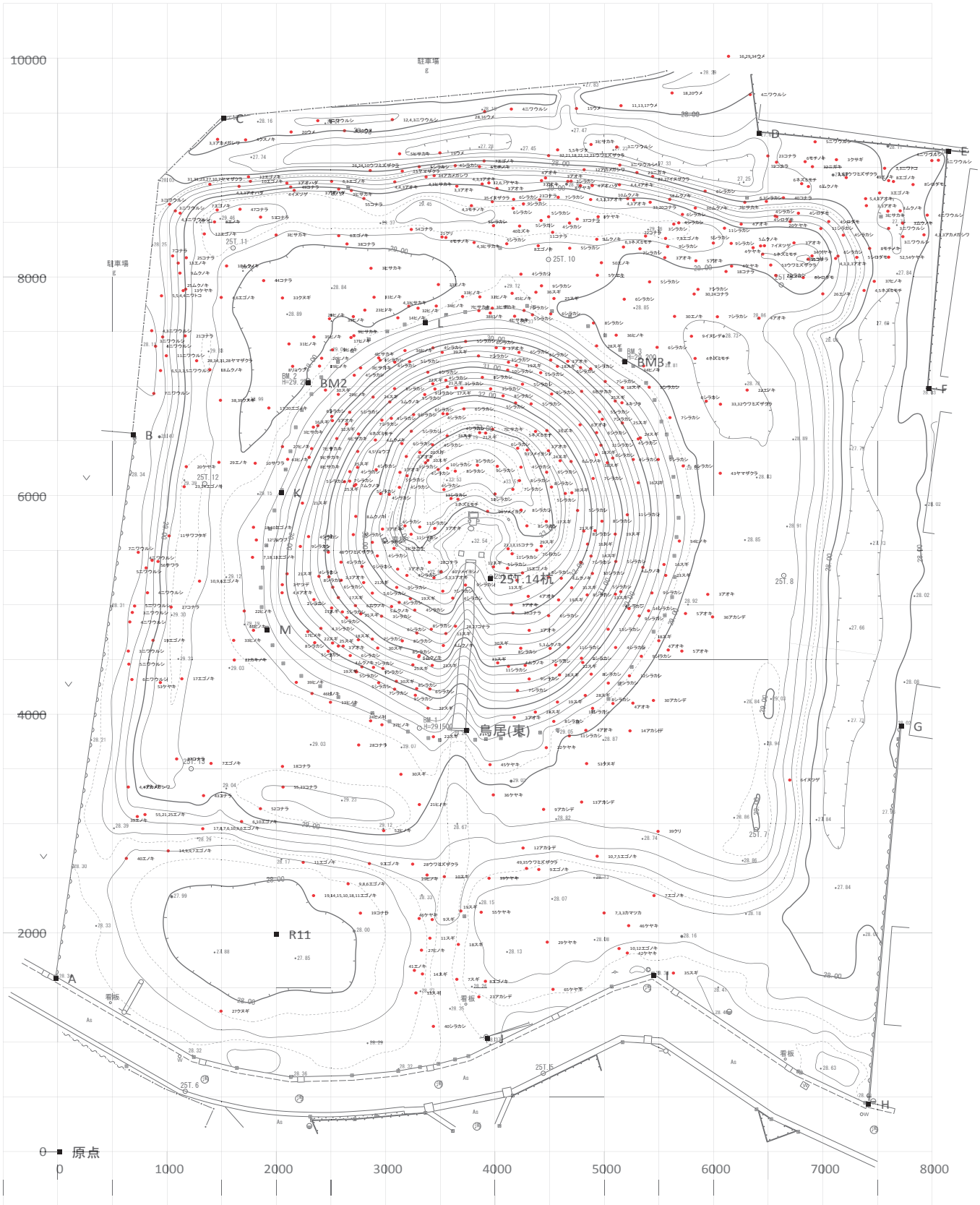
順位	樹木名	積算胸高断面積 cm^2	株数	1 株の平均胸高断面積 cm^2	直径＊ cm^2
1	コナラ	32483	33	984	35
2	スギ	31622	77	411	23
3	ヒノキ	31569	39	809	32
4	ケヤキ	23862	22	1085	37
5	ソメイヨシノ	15288	3	5096	81
6	エノキ	13297	12	1108	38
7	クヌギ	13244	4	3311	65
8	ウワミズザクラ	12537	8	1567	45
9	エゴノキ	11128	33	337	21
10	シラカシ	8707	197	44	7
11	ヤマザクラ	7291	4	1823	48
	その他	24784	194	128	13
	全樹木	225812	626	361	21

＊ 1 株の平均胸高断面積を円に見立てたときの当該円の直径

Ⅲ -2-1 表　種別積算胸高断面積（降順）と株数の関係



Ⅲ -2-1 図　積算胸高断面積（㎡）


10000
8000
6000
4000
2000
0
1000
2000
3000
4000
5000
6000
7000
8000
原点
駐車場
BM2
BM3
BM4
BM5
BM6
BM7
BM8
BM9
BM10
BM11
BM12
BM13
BM14
BM15
BM16
BM17
BM18
BM19
BM20
BM21
BM22
BM23
BM24
BM25
BM26
BM27
BM28
BM29
BM30
BM31
BM32
BM33
BM34
BM35
BM36
BM37
BM38
BM39
BM40
BM41

（2）山王塚の民俗

大久根茂（川越市文化財保護審議委員）

1　山王信仰について

山王塚古墳は、塚の上に「山王大権現」を祀っていることから付けられた名称である。これがいつの時代に祀られるようになったのかは明らかでないが、墳頂にある石祠には享和元年（1801）の年号が刻まれている。しかし、その脇に立つ庚申塔には寛文 12 年（1672）の銘があり、山王信仰の猿と庚申信仰の猿との結び付きを考えると、庚申塔が建立された 17 世紀後半にはすでにこの塚に山王信仰が定着していたと見ることができる。

ちなみに山王信仰とは、比叡山麓にある日吉（ひよし）大社（滋賀県大津市）から生じたものである。平安時代の初め、天台宗の開祖である最澄が比叡山に延暦寺を開くにあたり、日吉大社で祀る大山咋神（おおやまくいのかみ）・大物主神（おおものぬしのかみ）の 2 神を「山王」と称して、同寺の守護神にしたことに始まるという。その後、天台宗が全国に広まる中、神仏習合のもとで日吉社が各地に勧請され、日吉神社、日枝（ひえ）神社、山王神社などという名で創建された。現在、こうした社名の神社は日本全国に約 3,800 社を数えている。

川越市内では、喜多院に隣接する小仙波町の日枝神社と上戸の日枝神社が著名であり、ともに貞観 2 年（860）に比叡山の日吉大社を勧請したものと伝えている。また『川越の石仏』（1973 年川越市発行）によれば、このほか野田と鴨田に山王を祀る石祠があり、古谷上の古尾谷八幡神社裏には猿の石像があるという。

2　古老の語る山王塚

山王塚古墳のある一帯は、江戸時代には大塚新田村と呼ばれていた。明治 22 年（1889）に周辺の村々と合併して大田村となり、昭和 18 年（1943）に隣の日東村との合併で大東村に、その後昭和 30 年に川越市に編入して現在に至っている。

昭和 45 年に埼玉県が撮影した航空写真（埼玉県立文書館地図センター所蔵）を見ると、畑が広がる中にほぼ正方形の森（山王塚古墳）があり、その南側に数軒の農家が屋敷林とともに写っているのがわかる。関越自動車道が川越まで開通するのが翌 46 年のこと。古墳からわずか 200 mほどのところに川越インターチェンジができ、連絡道となる国道 16 号も整備されて、その後周辺の開発と宅地化が進行した。

地元では山王様を祀る場所として、親しみを込めてこの塚を「山王やま」と呼んでいた。昭和 33 年に「山王塚」として川越市の史跡に指定され、同 44 年には「南大塚古墳群」として県選定重要遺跡になった。しかし周辺の人たちの多くは、昭和 59 年に隣接する山王塚西古墳の発掘調査が実施されるまで、これが古墳とは知らずにいたようである。

山王塚の地権者は U 家・M1 家・M2 家・S 家の 4 軒だが、いずれも塚から離れたところに住んでいるため、日常における関わりは薄いものだったという。代わりに塚のすぐそばに住む 3 軒の農家が「山王やま三軒」と呼ばれて日常の管理などを行ってきた。この 3 軒は普段は塚の掃除などを行い、正月にはそれぞれの家が山王様の祠に餅を供えていた。なかでも故牛窪嘉重氏は中心的な役割をもち、鳥居や石灯籠も奉納している。

現在の塚は照葉樹とスギに覆われ、日差しが届きにくい植生となっているが、昭和 30 年ごろまで

は落葉広葉樹のコナラが多く、林内は明るかった。コナラは太くなる前に焚き木として伐採したため、幹は幾本もの株立ちになっていた。林床にはスミレ・イカリソウ・リンドウ・ススキなどの草花が見られ、秋には自然薯もとれたし、その実（むかご）を採って食べることもあった。ここを所有する農家ではコナラの落ち葉をかき集めて持ち帰り、畑の堆肥にしていた。そして適度な斜面は、子供たちにとって格好の遊び場にもなっていた。

正面の参道にはスギの大木が何本も並んでいた。塚の頂にもスギの巨木があり、御神木とされていた。いずれも枯れたり伐採されたりしてしまったが、ご神木の残骸は今でも祠の後ろに見ることができる。

春には祭りが行われた。山王様の御眷属が猿なので祭日は4月初申の日。特に祭りの名称はなく、「山王やまのお祭り」などと呼んでいたようだ。この日、露天商が出ることはなかったが、塚の上（祠の右側）にヤグラと称する舞台を設け、舞台上では地元大塚新田の人たちがお囃子を演じてにぎわいをみせた。このヤグラは分解して保管され、今でも夏祭り（天王様の祭り）には組み立てて使用しているという。

祭りは昭和 30 年代初頭に行われたのを最後に、それ以降は実施されていない。廃れた理由は明らかでなく、かつての祭りの様子を知る人も少なくなってしまった。

3　山王塚の石造物

山王塚の墳頂には山王信仰の中心になる山王社の石祠が、真南を向いて建てられている。享和元年（1801）の銘があり、正面には「山王大権現」とともに「浅間大□□（権現か）」という文字が陰刻されている。石造物は、鳥居以外はこの山王社の周辺に集中している（下表参照）。奉納者は大半が地元大塚新田の個人もしくは講中であり、信仰圏が広くはなかったことがうかがえる。

庚申塔には寛文 12 年（1672）の銘があり、これは市内で確認されている庚申塔としては、宮元町妙義神社の寛文 11 年（1671）に次ぐ古さのもののようである。

No.	名　称	奉　納　年	寸　　法*	奉　納　者	備　　考
1	鳥居	平成 3 年（1991）	200.0 × 223.0	牛窪嘉重	「山王社」
2	石灯籠（1 対）	（なし）	22.5 × 19.5 × 133.0	牛窪嘉重	
3	山王社石祠	享和元年（1801）	90.5 × 58.5 × 96.0	大塚新田　牛久保兵左エ門	「山王大権現」「浅間大□□」
4	石猿（1 対）	（なし）	22.0 × 18.0 × 39.0	（なし）	御幣持ち
5	石鉢	（なし）	26.5 × 24.6 × 14.0	大塚新田　新井忠七他 2 名	
6	稲荷社石祠	寛政11年（1799）	21.2 × 13.7 × 39.0	牛久保氏	「稲荷大明□」
7	庚申塔	寛文12年（1672）	49.0 × 40.0 × 130.5	今福村　牛久保佐エ門	「奉造立庚申塔」、三猿、蓮花
8	榛名社石祠	文久元年（1861）	41.5 × 46.0 × 86.5	大塚新田　講中	「榛名大権□」

＊寸法は幅×奥行×高さ（cm）で台石を含む数値。

Ⅲ -2-2 表　山王塚の石造物

昭和 45 年 A 22-16

昭和 50 年 A 22-16

墳頂の山王社と石灯籠

山王社の石祠と石猿

御幣をもつ石猿

寛文 12 年の庚申塔

榛名社の石祠

榛名社石祠のわきに貼られた
榛名講の祈祷札

Ⅲ -2-3 図　山王塚の空中写真・石造物写真

第Ⅳ章　総括

第 1 節　山王塚古墳の調査成果

(1) 墳丘と周溝

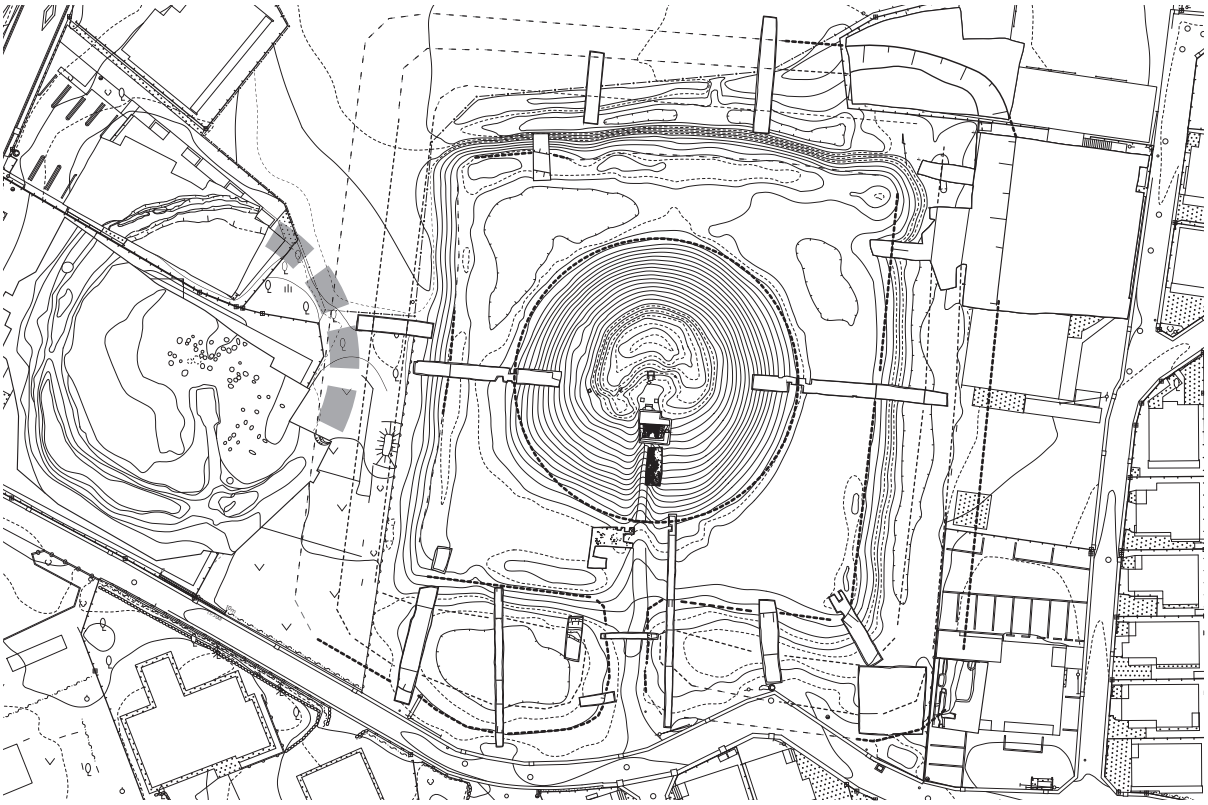
墳形は平面方形の１段目に円形の２段目を乗せる上円下方墳である。葺石等の外部表装は伴わない。

調査の成果から、上円部直径 37m、下方部は東西 69m、南北 70m（推定）の規模である。周溝外周縁は一辺およそ 90m（推定）と復元する。墳丘は旧地表面から現況で 5m の盛土を積み上げている。

墳丘の構築過程は、まず上円部から築かれたと復元される。上円部の墳丘盛土は旧表土の上にローム土を中心として積み上げられた。しかし、石室直下では旧表土の黒色土からローム層上面にかけて取り除かれており、そこに夾雑物の無いとくに良質なローム土を叩き締めながら版築状工法で基壇状盛土が行われている。石室はこの基壇状盛土の上に構築された。石室側壁の裏込めにはローム土と砂礫を互層状に積み上げている。石室構築と前後して上円部は積み上げられ、ローム土の墳丘盛土の上は砂礫を混ぜ込んだ黒色土で被覆される。

墳丘盛土に用いられたローム土は上円部の周囲に、大形土坑を掘削し獲得したものと考えられる。その後、大形土坑を埋め戻し、下方部の墳丘盛土および周溝底面を成形している。

下方部墳丘盛土は土手状盛土と水平盛土に区分される。まず下方部外縁に下方部の外形を区画するように土手状盛土が施される。その後、上円部裾部と土手状盛土の間を埋めるように水平盛土を施



Ⅳ -1-1 図　山王塚古墳復元図（S=1/1000）

し、墳丘が完成する。土手状盛土は水平盛土より高く盛り上げており、域外から見上げた時、水平盛土は目視できない。

周溝はおおむね 15m の幅広で緩斜度に立ち上がる。南西側では最大幅 19.5m である。墳丘の南側、石室主軸の延長線上に周溝を掘り残した長さ 16.5m、幅 5.6m の土橋が設けられる。

(2) 埋葬施設

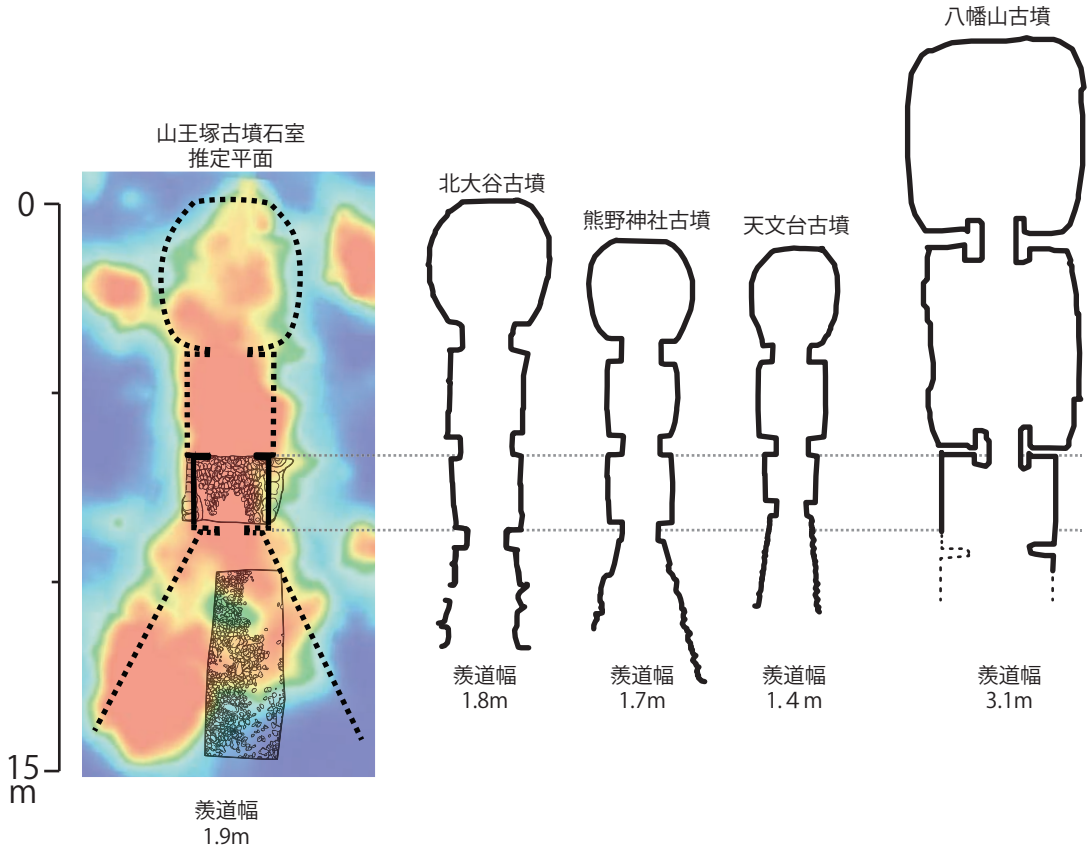
発掘調査とレーダー探査の成果（第Ⅱ章 4 節）から、主体部は前庭部前端から玄室奥壁までの全長が 15m 程の奥行きと考えられる。複室構造の横穴式石室である。この規模を鑑みると玄室・前室・羨道と続く一連の室部の手前にハの字状に開く前庭部が続くと想定され、石室の長さは 9m、前庭部が 6m の規模と復元される（Ⅳ -1-2 図）。主軸は南北軸に対し 5°程度東へ傾き、南側に向かって開口する。

羨道は角閃石安山岩を小口に平積みした石室である。両壁は直線的に平行し、幅は 1.9m である。奥行きは 2m 程度と推測される。

羨道と前室を隔てる前門柱石が 2 枚、羨道に引き倒されたように出土した。門柱石は緑泥片岩製で長さ 140cm、幅 60cm、厚さ 10cm である。それを受ける角閃石安山岩製の基礎を、対になる東西それぞれで検出した。

現在のところ追葬の痕跡は確認できない。

玄室奥壁は上円部墳丘中央付近に想定されるが、羨道の遺存状況およびレーダー探査の結果を鑑



Ⅳ -1-2 図　石室復元図と類例比較

みると、玄室の遺存状況もさほど良くないものと考えられる。

石材は石室を組み上げる際に基壇状盛土の上で成形されたと考えられ、角閃石安山岩や緑泥片岩の剥片、砕片が墳丘盛土に混入している。羨道から出土した角閃石安山岩の石室石材は側面に転礫面の大半を残すものが多く、実際に側壁に積まれた石材も同様である。石室内部側から一見すると転礫と相違はない。他方、中には切組状に加工された平坦面を持つブロック状の角閃石安山岩製石材の断片も出土しており、切石切組技術の存在が覗える。埼玉県内において角閃石安山岩を用いた石室は胴張り形が主体を占める（青木 2012）。胴張り形の横穴式石室は 6 世紀末に北武蔵で採用され、7 世紀に入り北武蔵の大形円墳の八幡山古墳や、南武蔵では首長墓の横穴式石室でも採用されている（第Ⅲ章 1 節 4 項）。このことから山王塚古墳の規模を考えると未確認の玄室、あるいは前室も含めて切石切組の側壁を持つものと考えられる。また､少なくとも玄室の平面形は胴張り形を呈すると想定される。

なお、前庭部、羨道からは鉄釘が 15 点出土したことから、組合せ式木棺が使用されたものと考えられる。

（3）出土遺物

前庭部からは須恵器の平瓶 1 個体が出土した。羨道からは引き抜かれた前門柱石に潰れるように頸部片が出土しており、また床面から 50cm ほど上からも頸部片が出土しているが、これら羨道から出土した須恵器片を接合した結果、フラスコ形長頸瓶が 3 個体存在したと判断した。ガラス小玉 2 点は羨道礫床付近の掘削土をフルイ掛けして検出した。

いずれの遺物も、原位置は保っていないものと判断され、後年に石材が抜き取られた際に、石室が大々的に破壊されたものと考えられる。その結果、石室内外で角閃石安山岩の側壁材および緑泥片岩の前門柱石を検出した。その他、チャートや砂岩の河原石を大量に検出している。

（4）築造年代

発掘調査で確認された各地の上円下方墳の築造年代はいずれも斉一的な規格を持ち、7 世紀後半から 8 世紀初頭に限られる（第Ⅲ章 1 節 4 項）。特異な墳形がいずれもこの時期に集中することから、山王塚古墳も同様に 7 世紀後半の築造と考えられてきた。前庭部及び羨道から出土した須恵器は 7 世紀中葉の製作年代と推定したが、古墳の築造年代は 7 世紀第 3 四半期と考える。

名　称	所在地	築成	葺石	規模（m）			埋葬施設	出土品		築造年代
				方台部辺長	上円部直径	高さ		副葬品	供献品	
石のカラト古墳	奈良県奈良市，京都府木津町	2 段	有	13.8	9.2	2.9	横口式石槨			7 世紀末～8 世紀初頭
清水柳北 1 号墳	静岡県沼津市	2 段	有	12.7	9.0	2.8	石櫃			8 世紀初頭
武蔵府中熊野神社古墳	東京都府中市	3 段	有	32.0	16.0	5.0	横穴式石室	ガラス小玉，鞘尻金具，鉄釘		7 世紀中葉
天文台構内古墳	東京都三鷹市	2 段	無	30.0	18.0	（3.6）	横穴式石室		須恵器長頸瓶，土師器坏	7 世紀中葉
山王塚古墳	埼玉県川越市	2 段	無	69.1	37.0	5.0	横穴式石室	ガラス小玉	須恵器長頸瓶	7 世紀第 3 四半期
野地久保古墳	福島県白河市	2 段	有	16.0	10.0	1.5	横口式石槨			7 世紀末葉～8 世紀初頭

Ⅳ -1-1 表　発掘調査された上円下方墳

第２節　山王塚古墳の歴史的価値

南大塚古墳群は５世紀前葉を端緒とする群集墳であり、その大半が直径 10 ～ 30m 級の円墳で占められる。この伝統的な墓域の一角に山王塚古墳は造営された。市域で同規模程度の古墳群としては、入間川を挟んで対岸側の的場古墳群やさらに小畔川を越えた下小坂古墳群、武蔵野台地北端で古墳時代前期より続く仙波古墳群などが知られるが、７世紀前半以前に傑出した存在はない。

南大塚古墳群は、６世紀後葉になり前方後円墳である南大塚４号墳、７世紀前葉には直径 40m を超える山王塚西古墳が出現する。そして７世紀第３四半期、山王塚西古墳のすぐ脇に周溝を重ねて築造されたのが、日本最大の上円下方墳、山王塚古墳である。墳丘規模は当該期において入間地域のみならず、武蔵地域でも屈指の規模を誇り、また上円下方墳という特異な墳形を採用したが、これを最後に南大塚古墳群の墳丘造営は停止した。

前代の古墳時代後期の武蔵地域を見渡すと、首長墓と目される大型前方後円墳は大宮台地北端域から加須低地にかけて、埼玉古墳群と若小玉古墳群およびその周辺に極めて偏るかたちで集中しており（太田 2007）、その政治的中心が北武蔵にあったことは疑う余地も無い。その後７世紀初頭頃には同地で埴輪を伴わない中の山古墳、小見真観寺古墳、若王子古墳（いずれも行田市）が築かれた後、武蔵地域での前方後円墳の造営は停止する。７世紀代前半に入ると、埼玉古墳群、若小玉古墳群では浅間塚古墳、白山古墳、八幡山古墳（いずれも行田市）など大形円墳が築造され、伝統勢力が引き続き当地域を統べる一方で、周辺地域では後続する有力な古墳は見られないという。

そして７世紀後半、それ以前と比較すると墳丘規模ではやや劣る方墳、多角形墳、上円下方墳が各地で造営されるようになる。事例を挙げると比企地区の穴八幡古墳、北足立地区の八塚古墳、入間地区の鶴ヶ丘稲荷神社古墳､そして山王塚古墳である（太田前掲）。また､南武蔵では７世紀中葉になってから、それまで空白地帯ともいえる多摩川上流域に、北大谷古墳（東京都八王子市）や、上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳（同府中市）、天文台構内古墳（同三鷹市）が築造された。

これらのなかで、山王塚古墳には一際大きさに対する強い志向を感じざるを得ない。下方部一辺 69m の計測値からのみならず、周縁に土手状盛土を巡らせることで少ない労力で墳丘を高く見せる最大の効果を生み出した点（第Ⅲ章１節２項）、基壇状盛土で石室を持ち上げることで土圧を減じて巨大な墳丘盛土内に横穴式石室を築く工夫、幅広く開削した周溝からは並々ならぬ大きさへの意識を読み取ることができる。多大な労力を注ぎ込んだ大きさによる権威付けという点も、伝統的な価値観に基づくと言えるが、それを可能にする新たな試みも融合する。

６世紀末ないしは７世紀初頭、北武蔵地域で導入された胴張の横穴式石室は、とくに比企地域、北埼玉地域で複室構造をとり、これらが南武蔵地域へ影響し、また拡散されたとされる（小林 2014、草野 2016）。そして切石積み胴張りの複室構造の横穴式石室は先述の南武蔵の首長墓に採用された。その過程で同じく武蔵野台地の、最北端に位置する山王塚古墳にも採用されたことになる。

この間の歴史的背景を概観すると、北武蔵地域から南武蔵地域へと「政治センター」が移ったとされ、そこには交通網の整備と多摩丘陵の資源開発の目論見があったと解釈される（広瀬 2012）。周知の通り、続く８世紀初頭には南武蔵地域に国府が置かれ、多摩川上流域の政治的中心としての立場は確固不動となっていく。そしてその過程を端的に示すのが終末期古墳というわけである。

山王塚古墳の主体部は、三つの空間を持つ切石切組胴張り形の横穴式石室を想定したが、同類例は決して多くはなく、北武蔵では八幡山古墳、南武蔵では先に触れたが多摩川上流域左岸の上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳と天文台構内古墳、そしてそれよりもやや上流右岸域の北大谷古墳で

地区	名称	所在地	墳形	墳丘		周溝		埋葬施設				出土遺物 副葬品	築造年代
				築成	規模	形式	規模	形式		規模	掘り込み地業		
大里	前原愛宕山古墳	深谷市	方墳		一辺 37m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀？
	宮塚古墳	熊谷市	上円下方墳？	二段	上円部 直径 10m 下方部 一辺 24m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	8 世紀 初頭？
埼玉	浅間塚古墳	行田市	円墳		直径 58m			不明	不明	不明	不明		7 世紀 前半
	白山古墳	行田市	円墳		直径 50m			横穴式石室	角閃石安山岩，緑泥片岩				7 世紀 前半
	戸場口山古墳	行田市	方墳	不明	一辺 42m	二重	一辺 64m	（横穴式石室）	凝灰質砂岩。切石積	不明	不明	（大刀）	7 世紀 中葉
	八幡山古墳	行田市	円墳	不明	直径 80m	一重		横穴式石室	角閃石安山岩，輝石安山岩質溶岩，緑泥片岩。切石積	全長 16.7m	版築	須恵器長頸瓶，銅碗，直刀，刀装具，銀製弓筈，鉄鏃，夾紵棺，棺金具，鉄釘	7 世紀 中葉
	地蔵塚古墳	行田市	方墳		一辺 28m	一重		横穴式石室	角閃石安山岩，緑泥片岩。切石積，胴張	（残 4.1m）	不明	鉄鏃，須恵器	7 世紀 後半
比企	穴八幡古墳	小川町	方墳	二段	一辺 28 m	二重	一辺 61 m	横穴式石室	緑泥片岩。複室	全長 8.2m	版築	須恵器細頸瓶，須恵器広頸瓶，土師器坏，鋤先型鉄製品，刀装具	7 世紀 後半
	高坂 50 号墳	東松山市	方墳	不明	不明	一重	不明	（横穴式石室）	凝灰岩	不明	不明	須恵器無蓋長脚高坏，長頸壺，平瓶，はそう，短頸壺，土師器甕	7 世紀 中～後葉
	茶臼山古墳	吉見町	方墳	二段	一辺 28m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀 中葉
入間	鶴ヶ丘 1 号墳	鶴ヶ島市	方墳	不明	（残 7m）	一重	一辺 35m	横穴式石室	河原石積。胴張	（残 3.8m）	版築	棒状鉄製品	7 世紀 後半
	鶴ヶ丘稲荷神社古墳	鶴ヶ島市	方墳	一段	一辺 21m	一重	58 × 50m	横穴式石室	凝灰岩切石積，羽子板形	（残 4.5m）	版築	鉄釘	7 世紀 後半
	土屋神社古墳	坂戸市	円墳	一段	直径 45m	不明	不明	横穴式石室	凝灰岩切石積，胴張	（残 4.1m）	不明	不明	7 世紀 前半
	石上神社古墳	坂戸市	円墳	一段	直径 50m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀？
	勝呂神社古墳	坂戸市	円墳	不明	直径 50m	不明	不明	不明	緑泥片岩	不明	不明	不明	7 世紀 前半
	新山 2 号墳	坂戸市	方墳	不明	（残 20m）	一重	一辺 53m	横穴式石室	凝灰岩切石積，羽子板形	不明	あり（軟弱）	不明	7 世紀 中葉
	新町 10 号墳	坂戸市	方墳	不明	一辺 27m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	鶴ヶ丘G区 13 号址	川越市	方墳	不明	不明	一重	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀 後半
	小堤山神古墳	川越市	円墳	一段	直径 63m	不明	不明	横穴式石室	角岩切石，緑泥片岩。胴張	（残 3.5m）	不明	直刀，耳環	7 世紀
	愛宕神社古墳	川越市	円墳	二段	直径 45m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	直刀，馬具	7 世紀 前半
	山王塚古墳	川越市	上円下方墳	二段	上円部 直径 37m 下方部 一辺 69m	一重	一辺 90m	横穴式石室 基壇状盛土	河原石，緑泥片岩，角閃石安山岩。複室構造	（全長 15m）	なし	須恵器長頸瓶・鉄釘・ガラス小玉	7 世紀 第3四半期
	南久我原 1 号墳	川越市	方墳	不明	不明	一重	一辺 13m	不明	不明	不明	不明	須恵器	7 世紀 前半
北足立	下忍宝養寺古墳	鴻巣市	方墳	不明	一辺 45m	不明	不明	不明	不明	不明	不明		7 世紀？
	方墳大塚古墳	さいたま市	方墳	不明	一辺 25m	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀？
	琵琶島古墳	さいたま市	（方墳）	不明	不明	一重	不明	（横穴式石室）	凝灰岩	不明	不明	須恵器	7 世紀
	本杢古墳	さいたま市	方墳		一辺 20m	一重	不明	不明	不明	不明	不明	不明	7 世紀
	八塚古墳	朝霞市	方墳		一辺 17m	二重	一辺 25m	横穴式石室	砂岩切石。胴張	不明	不明	耳環・須恵器	7 世紀 中葉

Ⅳ -2-1 表　北武蔵の終末期古墳

ある（Ⅳ -1-2 図）。

八幡山古墳は大形円墳で、直径 80m とされる墳丘規模や長さ 16m の横穴式石室、埋葬に夾紵棺、漆塗木棺が用いられた点をみても、武蔵国内でも傑出した存在感を示す。長大な横穴式石室は緑泥片岩と角閃石安山岩、凝灰岩が併せて使用されており、T 字に緑泥片岩を組んだ玄門、前門や、幅 3m を超える石室平面形態は、他の胴張り形三室構造の石室とは趣を異にする。

多摩川上流域の３古墳は７世紀中葉以降に築造された。時期的には山王塚古墳と同時期と考えられ、山王塚古墳と同様に新たな石室構造を採用した。山王塚古墳の石室において、確実な計測値は、羨道幅の 1.9m である。３例と比較するとわずかに幅広であり、石室の奥行きも同規模かやや長いものとして差し支えないと考えている（Ⅳ -1-2 図）。ただし山王塚古墳の前門柱石は、厚さ 10cm の緑泥片岩の板材を直立させたものであったため、羨道と前室の連結部は狭い。羨門、玄門の幅も同様と復元するならば、厚さ 60cm 前後の切石を用いた南武蔵３例と比較すると各室部の間隔が狭くなるため、石室全体の平面形態はやや異なる。また前庭部については、山王塚古墳は他の例よりも広く開くことが想定される。しかしながら、類例といい得る同規模の横穴式石室が構築されたものとみて差し支えない。

石室構築においては、石材採集地と考えられる利根川流域から遠く離れた角閃石安山岩の使用も興味を引く。緑泥片岩の使用についても北武蔵では分布の南限と言える。また、北武蔵では切石切組石室は小畔川以北の入間台地よりも北位にとくに集中しており、川越台地での類例は知られていない。これらの点でも周辺古墳群とは異なり、横穴式石室を実現するために新たな労力を払ったことになる。

革新的という点では、山王塚古墳の墳丘構築にあたっては終末期古墳特有の新たな技術の導入がなされた。版築状工法や基壇状盛土は仏教寺院建築技術との共通点が指摘され（第Ⅱ章第１節２項）、また上円下方墳という新たな墳形を採用している。

この伝統と革新の対照は、山王塚古墳の置かれたひと・モノ・情報の通路のあり方を連想する。伝統的な通路とは水路を指し、地域文化が流域ごとに共通する特徴を有することを証左とする。入間川、荒川などの大河川のみならず、支流の中小河川、そしてそれらが開析した河岸段丘縁辺部も含め、自然地形による古くからの通路であったと想像する。そして革新的な通路とは自然地形の制限を克服した陸路であり、山王塚古墳の西方 2.5km に７世紀後半以降に開削された東山道武蔵路を指す。つまり、伝統的な入間川水路を見下ろす南大塚古墳群の被葬者達は、古くからの水運を掌握した者であった。そしてその中で傑出した存在である山王塚古墳の被葬者は、新たな陸路である東山道武蔵路の敷設に携わることで律令体制へ向けた畿内政権に奉仕し、力を得た在地豪族の躍進した結果とみることが出来る。古墳時代を通して並立的な政治勢力が林立した入間地域において、７世紀後半に強力な力を付けたものが現れた。東山道武蔵路の開削は、当然ながら原東山道から、のちの国府等の政治拠点の設置を前提として巨視的に時空間を見通す者の存在が前提となる。それは畿内政権を置いて他ならず、山王塚古墳の被葬者が畿内政権との結びつきをもち、特異な墳形と新たな土木技術を採用したと考える所以である。

８世紀には入間川を挟んで対する入間台地に入間郡家が設置されるが、７世紀後半に遡る山王久保遺跡の遺構からは、評家が存在した可能性も指摘されている（第Ⅲ章第５項）。また、「驛長」墨書土器が出土した八幡前・若宮遺跡は、武蔵国府から数えると所沢市東の上遺跡に次ぐ３番目の駅家

とされ、水陸による文物の交差点の様相を呈する。東山道武蔵路は 8 世紀後半には官道としては廃されるものの、その後は鎌倉街道やその脇道として利用されたと考えられており、依然として重要な交通の要衝であった。後の 12 世紀、対岸の霞ヶ関遺跡のすぐ北側に、秩父平氏の流れを汲む河越氏が居を構える(河越館跡)。その背景には先述の通り当地が入間郡家が置かれた入間郡の中心地であったため、新興勢力である河越氏による公権の吸収、地域権力の継承があったとされる（落合 2010、平野 2010)。もちろん、引き続き水陸の交通の要であったことは想像に難くない。

このように山王塚古墳は、在地の伝統的墓域に遠隔地の石材と足下のローム土を用いて作り上げた大型の上円下方墳である。基壇状盛土の上に新たな構造の石室を組み、版築状工法で墳丘盛土を積み上げ、土手状盛土と幅広い周溝を巡らせることに労力を費やすことで、大きさに固執した墳墓である。背景には林立した在地勢力の中で、新たな通路、地方政治の拠点設置を求めた畿内政権に奉仕することで、武蔵地域の有力者へと躍進した在地首長のあり方をみることが出来る。

そして入間郡の中心は、やがて対岸側の霞ヶ関地区へと移ることになるが、この山王塚古墳は一連の歴史過程と画期とを象徴する重要な記念物と評価できる。

主要引用参考文献

青木弘　2013「埼玉県内横穴式石室の事例集成」『研究紀要』27　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

太田博之　2007「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊 15　雄山閣

落合義明　2010「中世東国の中の河越氏・河越館」『よみがえる河越館跡　国指定史跡河越館跡の発掘調査－その成果と課題』第 34 回企画展展示図録　川越市立博物館

川越市立博物館編　2015『古代入間郡の役所と道』第 41 回企画展展示図録　川越市立博物館

草野潤平　2016『東国古墳の終焉と横穴式石室』　雄山閣

小林孝秀　2014『横穴式石室と東国社会の原像』　雄山閣

塩野博　2004『埼玉の古墳』全 5 巻　さきたま出版会

田中信　2015「入間郡の古代史を考える」『古代入間郡の役所と道』第 41 回企画展展示図録　川越市立博物館

平野寛之　2010「国指定史跡河越館跡－調査の成果と展望－」『よみがえる河越館跡　国指定史跡河越館跡の発掘調査－その成果と課題』第 34 回企画展展示図録　川越市立博物館

広瀬和雄　2012「多摩川流域の後・終末期古墳　7 世紀における東国地域の一動態」『国立歴史民俗博物館研究報告』170　国立歴史民俗博物館

武蔵野文化協会編　2010『武蔵野』84-1　武蔵野文化協会

第３節　山王塚古墳の保存と活用にむけて

１　今日までの経緯

山王塚古墳は、昭和 33 年（1958）6 月、墳丘部分が市指定文化財（史跡）に指定されました。同 44 年（1969）には、埼玉県選定重要遺跡「南大塚古墳群」に選定され、現況保存の措置がとられてきました。しかし、平成24年度から始まりました史跡内容確認に伴う本格的な発掘調査によって、山王塚古墳に対し大きな変化が生まれました。発掘調査は平成 29 年度まで 4 回実施され、この発掘調査によって重要な成果が得られました。この成果を基に山王塚古墳は、日本最大規模をほこり学術的に価値の高い上円下方墳（前章参照）であると評価されることとなりました。

２　保存・活用に向けて

(1) 基本的な考え方

山王塚古墳が学術的に価値の高い上円下方墳という評価に基づき、現在の市指定史跡から、「国指定史跡」の指定を目指します。その範囲は、現在の墳丘部分だけではなく、周溝も含めた範囲を保護すべき範囲とし、古墳を構成する遺構を保護することを優先します。

それとともに、整備、活用も含めた今後の山王塚古墳の在り方を示す保存管理計画・保存活用計画の策定を進めます。この計画には、地権者や地元住民の理解のもと、地元地区の人々の意見が十分に反映されるよう努めます。

(2) 基本方針の素案

山王塚古墳は、「国指定史跡」として保護することを優先しつつ、古墳の史跡整備を進めていくため次の 5 点を基本方針の素案とし、一つの方向性を提案します。

1）森林を活かした古墳公園とする。

山王塚古墳は、現在、樹木が生い茂る豊かな自然環境を形成している。この恵まれた森林を活かしつつ、上円下方墳を体感できる古墳公園とする。

2）体感型の古墳公園とする。

墳丘部、下方部、周溝部分などの上円下方墳の規模や、内部の石室などを体感できる古墳公園とする。

3）山王社と共存する古墳公園とする。

墳丘頂上には江戸時代の享和元年（1801）銘のある山王社が存在し、今も地元の人々から厚い仰を受け、信仰の対象となっている。この山王社をそのまま存続させ、山王塚古墳と共存する古墳公園とする。

4）地元住民の憩いの場とする。また、市内外の小中学生の総合学習の場として活用できる古墳公園とする。

5）大東地区の歴史や文化が理解できる核となる古墳公園とする。

山王塚古墳は、南大塚古墳群と呼ばれる古墳群の中に存在すること。また、東山道武蔵路の推定路の近くに位置し、それとの関係で注目されていること。また、この古墳がある大東地区の歴史や当地区独自の文化、例えば、大東地区は川越では数少ないサツマイモの産地であるので、サツマイモの紹介やイベント等を行い、郷土に対する愛着と誇りを育む。

3　今後の課題

全国的にみて価値の高い上円下方墳である山王塚古墳を保護し、その整備と活用を進めていく上で、今後様々な課題が生じることが想定されます。ここでは、山王塚古墳を「国指定史跡」として保護を進める視点からみた課題について考えます。

山王塚古墳は、現在は墳丘部分だけが市指定史跡として保護されています。古墳の周溝部分は、平成 24 年度から始まった発掘調査によって範囲や規模などがほぼ確認され、近年その重要性が指摘されるようになりました。現在、周溝部分に該当する部分の大半は開発が進み、僅かな範囲が未開発のまま残されています。こうした現状を踏まえ、墳丘部分はもとより、現在保護することが可能な周溝部分を、早期に保護する措置を講ずる必要があると考えられます。

山王塚古墳を「国指定史跡」として整備・活用するには、地元住民の十分な理解、協力が不可欠なものとなります。さらに、地元住民に山王塚古墳の価値を広め理解していただくため、積極的な普及啓発活動を行うことは勿論のこと、地元住民による勉強会などを立ち上げ、地元から山王塚古墳を保護する気運が高まる動きは欠かせないものといえます。このような活動を地道に継続することにより、地元住民が山王塚古墳の価値を理解し、愛着を持ち後世に残そうとする気運が強まることによって、山王塚古墳が郷土の誇りの象徴として永く守られていくものとなるでしょう。

写 真 図 版

山王塚古墳空中写真（南から）

山王塚古墳は、周囲の宅地化が進んだため、大東地区の貴重な雑木林となっている。墳丘の北側に南西－北東軸に入間川街道が走り、そのすぐ北には入間川街道と平行する武蔵野台地の崖線、その先に入間川の沖積低地が広がる。さらにその先の写真左上には、霞ヶ関遺跡や国指定史跡・河越館跡が所在する、入間台地が見える。

山王塚古墳空中写真俯瞰（上が北）

山王塚古墳現況（南西から）

昭和 59 年調査風景　墳丘北側（北から）

昭和 59 年調査風景　S59-3T（南から）

S59-1T（北から）

S59-2T（南から）

1 号トレンチ（南から）

2 号トレンチ（南から）

1 号トレンチ 上円部裾部礫検出状況（東から）

3 号トレンチ（西から）

4 号トレンチ（東から）

4 号トレンチ 上円部墳丘盛土（東から）

4 号トレンチ 墳丘盛土土層断面（北東から）

5 号トレンチ（西から）

5 号トレンチ 上円部墳丘盛土（西から）

5 号トレンチ 土層断面（南から）

6 号トレンチ（南から）

6 号トレンチ 下方部墳丘盛土（南から）

6 号トレンチ 周溝検出状況（北から）

8 号トレンチ（南から）

7 号トレンチ（東から）

8 号トレンチ 周溝外縁側立ち上がり（北から）

9b 号トレンチ 土層断面（東から）

9a 号トレンチ（南から）

10 号トレンチ（北から）

11 号トレンチ（北から）

11 号トレンチ 東壁土層断面（西から）

11 号トレンチ 西壁土層断面（東から）

12 号トレンチ（北から）

13 号トレンチ（西から）

12 号トレンチ 遺物検出状況（西から）

14 号トレンチ 前門柱石検出状況（南から）

14 号トレンチ 羨道西側の側壁検出状況（南東から）

14 号トレンチ 羨道礫床検出状況（南から）

14 号トレンチ 礫床および門柱石基礎検出状況（東から）

14 号トレンチ 門柱石東側基礎検出状況（南から）

14 号トレンチ 東側門柱石基礎の
緑泥片岩付着状況（南から）

14 号トレンチ 門柱石基礎西側検出状況（南から）

14 号トレンチ 西側門柱石基礎の
緑泥片岩付着状況（南から）

14 号トレンチ 北壁土層断面（南から）

14 号トレンチ 石室裏込め検出状況（東から）

14 号トレンチ 遺物出土状況（西から）

14 号トレンチ サブトレンチ石室直下の地業（北から）

12 号トレンチ出土　須恵器　平瓶

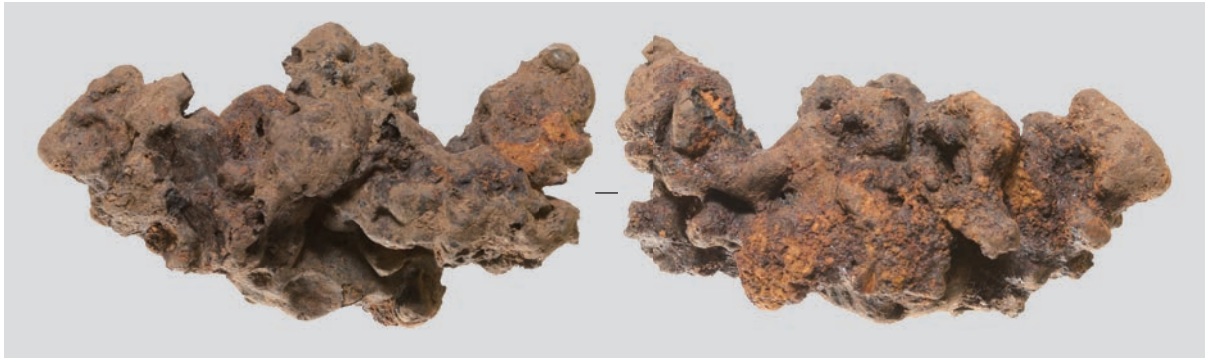
14 号トレンチ出土　須恵器
フラスコ形長頸瓶（1）

14 号トレンチ出土　須恵器
フラスコ形長頸瓶（2）

14 号トレンチ出土　須恵器
フラスコ形長頸瓶（3）

14 号トレンチ出土 須恵器　フラスコ形長頸瓶　破片

12・14 号トレンチ出土遺物（鉄釘、ガラス小玉）



14 号トレンチ出土鉄製品（表・裏）

14 号トレンチ出土 角閃石安山岩の加工石材（1）

14 号トレンチ出土 角閃石安山岩の加工石材（2）

14 号トレンチ出土　角閃石安山岩（奥＝側壁石材、手前左＝切石、手前右＝剥片）

14 号トレンチ出土　緑泥片岩

14 号トレンチ出土　河原石

※スケールは 10cm

報 告 書 抄 録

ふりがな	さんのうづかこふん　そうかつほうこくしょ
書　　名	山王塚古墳　総括報告書
著　　者	井口信久　池上悟　　石森光　　大久根茂　岡田賢治　小久保徹　清水理史 田中敦子　平野寛之　広瀬和雄　藤田健一　牧野彰吾　宮瀧交二　山田雄正
編　　者	藤田健一
編集機関	川越市教育委員会
所 在 地	川越市元町一丁目３番地１
発行年月日	平成 31 年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	調査次	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山王塚古墳（さんのうづかこふん）	第１次調査	川越市（かわごえし） 大塚一丁目（おおつかいっちょうめ）21 番６・11・12・13 豊田町三丁目（とよだちょうさんちょうめ）21 番 15、22 番２・３	11201	68	35° 53′ 58″	139° 27′ 41″	H25.2.12. ～ 3.15.	200㎡	史跡の内容確認
	第２次調査				～ 35° 54′ 01″	～ 139° 27′ 44″	H28.2.1. ～ 3.31.	230㎡	
	第３次調査						H28.7.11. ～ 10.5.	90㎡	
	第４次調査						H29.9.4. ～H30.2.1.	20㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王塚古墳	古墳	古墳時代（終末期）	墳丘、周溝、横穴式石室	須恵器、ガラス小玉、鉄釘、石室石材（角閃石安山岩、緑泥片岩）	上円下方墳。 古墳時代の遺物は主体部から出土。 他に墳丘や周溝から縄文時代、中近世の遺物も出土。

要　約

山王塚古墳は武蔵野台地の北西縁部に展開する南大塚古墳群の中に所在する終末期古墳である。墳形は上円下方墳であり、上円部直径 37m、下方部一辺 69m、墳丘高 5m である。石室は複室構造の横穴式石室である。レーダー探査の成果から、前庭部前端から玄室奥壁まで全長およそ 15m と推定される。発掘調査では、羨道および前庭部を検出した。石室は厚さ 180cm の基壇状盛土の上に組まれ、その上を上円部の墳丘盛土が覆う。下方部の外縁には土手状盛土が廻る。周溝幅はおおむね 15m で緩斜度に立ち上がる。上円部や下方部の土手状盛土は良質なローム土を素材としているが、周溝および下方部の直下にある大形土坑跡がローム土の採掘坑と考えられる。羨道では河原石の礫床、角閃石安山岩の側壁、緑泥片岩の前門柱石を検出し、須恵器、ガラス小玉、鉄釘が出土した。７世紀第３四半期の築造と考えられ、同時期に西側約 2.5km に開削された東山道武蔵路との関連が想起される。

山王塚古墳　総括報告書

発行日　　平成31年３月31日
発　行　　川越市教育委員会
　　川越市元町一丁目３番地１
編　集　　川越市教育委員会
印　刷　　朝日印刷工業株式会社